

---

# アルペール?カモミールを巡る諸問題

呪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルベール・カモミールを巡る諸問題

### 【ISBN】

275640

### 【作者名】

呪

### 【あらすじ】

ある日、罪を重ね服役していたカモは脱獄した。

この重大な事実は、しかし内容を秘匿され世界には伝わっていない。だからといってそれは脱獄を許容したわけではなく、あくまで秘密裏に動く為だった。

カモの利己的な判断から始まった脱獄は、世界に様々な影響を与える形で伝播していく……

作者も驚くぐらい、最初はネギ及びネギパー・ティーが出てきません

この物語は原作からゆつくり乖離していき、更に所々独自設定  
が入ります

## 1話 出るもの出らざるもの

それはイギリスの地にあった。

それは名前を出せば子供は泣き止み、名前を聞けば犯罪者は赤子のように泣き出した。

その名前は悪名といつ悪名を重ね、悪逆といつ悪逆を重ね、悪夢という悪夢を重ねた正義の顎門は罪悪を噛み碎く聖域 ニューゲート監獄と呼ばれていた。

時は遠く遡り1888年、時のイングランド王ヘンリー2世の命令により、ニューゲートの地に建設され、1236年に大きくその規模を拡大される。

そして悪名の1つとも言える出来事が1780年、ゴードン騒乱と呼ばれる騒ぎでは監獄に火が放たれ、300人もの受刑者が脱獄し、それを上回る多くの受刑者が焼死した。警察機関は全力で捜査をし、脱獄者の多くは再び逮捕され、処刑あるいは別の刑務所に収監されることになり、火が放たれたニューゲート監獄は2年後に再建された。

こうして様々な事がありつつも、1812年に監獄を訪れたエリザベス?フライにより、監獄内で賄賂や虐待、更には監獄内部の不衛生さがイギリスの下院議会に証拠付きで提出され、少しづつではあるがニューゲート監獄は改善されていくことになった。

だがそれでも、ゆつくりとニューゲート監獄は役目を終えていき、1902年には監獄を取り壊され、その跡地にオールド?ベイリー裁判所が建設されたのだった。

これが一般的なニューゲート監獄の歴史の推移。

しかし、ニューゲート監獄には一般人に知られていない秘密があった。それは、ニューゲート監獄地下深くに用意され、未だに現役として利用されている特別牢である、ニューゲート魔法監獄の存在である。

魔法は隠されながら、否定されながらも実在している。杖に乗つて飛ぶ事もあれば、詠唱ひとつで人間をどうこうするなんて朝飯前だ。

そんな危険な魔法使いを捕らえ、上部組織であるウェールズ魔法協会の命令のもと『おこじょ』に変えて封印し、牢獄で贖罪をさせるのがニユーゲート魔法監獄の仕事だった。

しかしながら、残念な事に崇高な思念は長く続かず、ニユーゲート監獄と同じ流れを汲むように、地下にあるニユーゲート魔法監獄でも賄賂や虐待が横行していた。

悪名は留まることを知らず、数々の罪人が旧世界？魔法世界を問わずここに送られ、誰にも知られる事なく闇に葬られていった。

この物語は、偶々ウェールズ魔法協会の勢力圏内で捕まつた為、手近なこの監獄へ放り込まれたおこじょの脱獄がバレる所から始まる。

周囲から餓えた臭いとともに、幾重もの濁つた惡意が混ざつた怨嗟の声が耳につき、この監獄の所長であるニック・ヴィルヌーヴは鼻を摘まみながらも、聞き慣れたとはいえるさい事にはかわりのない周囲を黙らせるべく、腰に付けられた警棒を抜いて手近な牢屋サイズ的にはゲージだが を叩き黙らせる。

ニックは正直に言つてしまえば、自分の仕事に何の誇りも持つていなかつた。幸か不幸か正義の魔法使いに興味を持たなかつたニックは、父の、そのまた父の、更に昔から続く惡習を打破しようとは思はず、むしろ父や祖父の教え通り生糀の拝金主義者だといえた。既に両親も他界し、自らがニユーゲート魔法監獄の所長になつたからは、止めようと思えば惡事は止められ、悪名を払拭しようすれば悪名を払拭できる立場にある。

しかしながら、今も続く「ユーティリティ魔法監獄」の悪名は、クライアントがここに求める条件の一つなのだ。

悪名が高いからこそここにはおこじょになつた犯罪者には地獄であり、地獄だからこそ魔法世界で政争に破れ政治犯とされる魔法使いがこの監獄に投獄された結果、この環境に耐えられずクライアント次第で”自殺”したり”病死”してしまつのだ。

そして当然ながら、政争とは無慈悲にもクライアント側の人間すら敗者にし、政財界問わずおこじょとなりここへ送られてくる。不幸にみまわれたそんな人間には、特別房が準備されている。

中が他の囚人には決して見えないよう、廊下を右へ左へ5重にも用意された扉を抜けると、そこにはまず地下でりながら青空が広がつていた。これは囚人の魔力を使ったフェイクでしかないが、高い天井に映された青空は本物と見紛うものである。

広い部屋の地面には草木が生え、あちこちにささやかながらも、造りが豪奢な小屋が点在していて中では何人かが生活をしていた。特別房と呼ばれるここに収監されているのは、全て人間である。そう、おこじょではなく人間の姿で生活をする囚人だつた。

彼らは政争に敗れた者や、つまらない賄賂がバレた者達で、この「ユーティリティ魔法監獄」に献金をしている者達でもあつたのだ。

魔法世界で捕まり実刑を与えられ、民衆の心を抑える為に悪名高い「ユーティリティ魔法監獄」へ移送され、そしてほとぼりが冷めるまで旧世界であるここに滞在し、タイミングを見計らつて模範囚等といった理由で刑期を短縮して魔法世界に帰る。

これこそが、過去から今へと繋がる「ユーティリティ魔法監獄」の、まさに悪習だと言えるだろつ。

一ヶくにしてみれば、世の中は金で回つている。それをわかりやすくなつたのがこの「ユーティリティ魔法監獄」であり、この待遇の差だと理解している。

「やれやれ、上客とはいえない急な依頼は勘弁願いたいんですが

……

疲れたように顔を顰めつつ、手にした書類を目的の小屋へと運んでいく。　書類の内容は釈放に関する手続きであった。

目的の小屋に入ると、そこはそれなりのブランド物やアンティークによつて飾り立てられていて、部屋の中心でソファーアに座りながらテレビを見ている軽薄そうな青年がいた。

彼の罪状は婦女暴行によるものだが、その罪を重く見た彼の祖父メガロメセンブリアでも財界にパイプを持つ政治家によりここへ献金とともに送られ、まだ刑期が残つていると言うのに孫に会いたいからと刑期短縮するよう追加献金が送られてきたので、こうして彼は晴れて刑期満了となり、こいつして釈放となつたのだ。

「でよ、こいつにサインするだけでいいのか？」

側仕えの女　女気がない監獄のために用意された魔法人形からペンを受けとると、スラスラと書類に名前を書き込むと氣だるげに足を組む。

相手がどんな態度であれ、本心から贖罪を願い罪を償おうが償うまいが、あいにくニックとしては積む物さえ積んで貰えれば興味はない。机に置かれた空のシャンパン瓶だって、彼のような囚人もつ親族や関係者の献金から成り立つてゐるものである。

書類に不備がないかだけ確認しなおし、問題なしの決裁印を捺してから形式的に人間をおこじょ化させる魔法道具を使い、きちんとおこじょにしてからゲージに入れて監獄の外へと運び出す。　こうしないと、流石に一般の囚人の前では様にならないのだ。

また5重に用意された扉を抜け、そのまま地上へ出る所定の位置までゲージを運び出すと、出所の最終段階で今一度おこじょ化が解除され、ついに彼は自由の身になれる。

別れ際に滞在に關する礼を言われたので、とりあえず魔法世界に

帰つても「」と呟くにと書いたのだが、彼は苦笑しながら帰つてしまつた。まあ、呪いの監獄と言つるのは冗談にもならないだろ。

胸元から取り出した手帳を眺めるが、今日は他に出所の手続きがないようなので仕事は終わりである。

いや、一応だが急遽出所を早めたせいで、書かなければならぬ書類がまだ残つてゐるのだが、別段急がなければならぬものでもないので後回しにする。

とはいへすぐに帰る訳にもいがず、所長室に寄つてからの帰宅になるのだ。こうして所長室に戻り、先程出所した小屋の魔法人形に片付けを命じ、次にいつ誰が入つても最高の持て成しができるよう準備させておく。

「……これで今日は帰れるか

カバンを持ち上げると、そのままゆっくり所長室から出て少し右に曲がつた先にひつそりと用意された扉を開け ふと、いつもの癖で反射的に手を伸ばしたが、自宅への直通路へ入る扉が開いている事に首を傾げる。

何故この扉が開いているのか？ いや、そもそも今日はここへ来た時に閉めただろうか？

「まあいいか

少し悩んだ上にニックが出した結論は、開いているからといつて何の問題もないというものだった。

この扉が開いているからといって、この監獄になんら不具合や不都合があるわけではなく、特に困る事はないだらうといつ考へが判断材料である。

通常ならば監獄と外部を繋ぐ道が開いていたとなれば、それはとても重大な問題になるだろ。

しかしながら、魔法使いとはいえない「じょ」を収監する「コーゲー」魔法監獄では、それこそ脱獄を狙う凶悪犯は虐待して氣力を奪つてゐる上に、所謂暗殺やテロを政治家に頼まれて収監された者は特別房で優待されてゐるので脱獄はありえない。

今までもそうして脱獄〇匹を達成してきていたので、これからもそのスタンスを二ツも他の看守も変える気は無かつた。それゆえに、実際に事が起きた時には脆くなる。

「ヴィルヌーヴ所長！ 大変です、ヴィルヌーヴ所長！」

これから帰宅だという所で声をかけられ、後ろを振り向けば初老の看守が冷や汗を浮かべ、息を乱しながら立っていた。

「どうした？」

「A-057のゲージに収監していたお「じょ」が、お「じょ」妖精のアルベール？カモミールが消えました！」

「何だと？！」

まさに青天の霹靂、まさに寝耳に水の言葉だつた。

最初こそ何を言つているのかわからなかつたが、真剣な表情で口にするのを見てやつと現状を理解し、無様に叫ぶことしかできない。

「も、もう一度監獄内を探しだせ！ 逃げ切れず隠れている場合もある！」

「わかりました！」

今までこれからも脱獄などあるはずがないとかをくくつてい

たため、じじーコーゲート魔法監獄には形骸化したマニュアルしか存在せず、マニュアルもまともに読まれたことすら無かつた。

そもそも、人間ならばまだしも、おこじょ化された上に魔力を抜き取るゲージに入れている以上は、たかがおこじょ如き畜生に脱け出せる筈がないと考えられていたのだ。

## 2話 追うもの追われるもの

夜空に煌めく星々の輝きも、優しげな光で静かに大地を見守る月も、そよそよと吹き抜ける柔らかな風も、この部屋を支配する沈鬱な雰囲気を吹き飛ばすには至らなかつた。

暗い表情を星々や月の光では明るく照らす事ができず、重たい空気の前には柔らかな風では脆弱過ぎるのが、ただただはね除けられるのみである。

「……それで、もう一度確認したんだな」

「一度と言わば二度三度と監獄内を捜しましたが、もぬけの殻です」

事件を知りニユーゲート魔法監獄の裏を知る4人は、円卓を睨み付けるように座つて会議をしていた。

内容は簡単なもので、脱獄したおこじょをどうするかといつものである。

「しかし、犯罪歴を見るに脱獄を試みるような大物じやないんだが」

「逃げたのは下着泥棒の常習犯で、典型的なクズですね」

「脱獄の経路は監獄から私の家まで繋ぐ経路か……抜かつたな」

脱獄ルートの特定も既に済んでおり、正面のゲートを使われた様子もなく、そして監獄に新たに外へと掘られた穴もない以上は、どうやっても脱獄ルートはここである「シクの邸宅へ続く地下経路だつた。

だが、たかだか脱獄如きで彼等がここまで沈鬱な雰囲気を撒き散

らす筈もなく、一番の懸念は脱獄ルートではなく上とのルートだった。

今まで良い意味でも悪い意味でも、ここは権力者の望んだ答えを出す優秀な監獄だった。 小屋の装飾には金も時間もかけ、料理はそこそこながらも高級品を使い、さながら3星ホテルのような持て成しをする事で感心を買い、その対価として巨万の富を築いてきた。 今までここに監獄のお世話になった者には、当然魔法世界の政財界に蔓延る権力者は元より、この世界でも諸々に携わる人間を時は持て成し、そして時には闇に葬つてきたのだ。

しかしながら、ここでもしこのニューゲート魔法監獄が脱獄を許すような”無能”になつたらどうなるだろうか？

魔法世界の酸いも甘いも闇の闇まで見てきた我々から、もしも”優秀”の2文字が失われたらどうなるだろうか？

彼等はそんな時に、脱獄を許すような”無能”な我々を助けるべく動くだろうか？

「ニューゲート魔法監獄に収監されたVIPたちは、ここでの情報はまさに政治生命を奪われる傷になるそれを、ただの”無能”が持つていることを許すだろうか？」

そう……ここニューゲート魔法監獄の真実を知っている人間は、”優秀”でなくなつた瞬間に自分達がしてきたように消される可能性が高い。

あくまで可能性でしかないが、それでもそんな可能性がありながらホイホイと上に脱獄の情報をあげ、連携して脱獄したおじょを捕らえようと考える剛毅な者はここに居なかつた。

「……この件については、握り潰し上への報告は取り止める。しかし、我々だけで脱獄犯を捕らえるぞ」

ニックの言葉に全員が頷き、ゆっくりとしかし確實に逃げ出したアルベルル？カモミールを追うべく、ニューゲート魔法監獄の裏を

知る者達が動き出した。

遅々として「そはいるが、情報は『ユーロゲート魔法監獄』へ集まつて来ていた。

実家に帰った痕跡はない。そして、正規の手続きで国外に出た記録がない為に、まだイギリス本土に居る可能性があるという事だ。だがしかし、得てして不幸に寄つてくるのは不幸ばかりなのである。

「ヴィルヌーヴ所長、嫌な情報が見つかりましたよ」

所長室へとそんな不幸を運んで来たのは、4人の中で20代と最年少であり勝手ながら期待のホープとして見ているアラン・クビサだつた。

彼はニックに言われて情報屋を漁っていたといふ、その驚くべき情報を手に入れたのだ。

本来ならば、情報屋に聞くということはそれを搜してゐるという情報を売る事に他ならないが、彼等の知つてゐる情報屋は腕がよく自分達を売ることなどわかつていたので、こうして堂々と情報屋を漁つっていたのだ。

何故情報屋が自分達の情報を売らないかといふと、情報を漁つた情報屋には目に見えない首輪がかけられているのだ。

その理由は簡単で、情報屋たる彼等は腕がよく、もつと大きな情報を手に入れるべく合法非合法問わず嗅ぎまわり、中には情報を手に入れる前に消された者や手に入れたが為に消された者もいるなかで、偶々手に入れるまえに捕まり上の『役に立つ』という判断のもと『ユーロゲート魔法監獄』で優待された者達だからである。

「ユーゲート魔法監獄では、その悪名とかけ離れた優待に田を白黒させ、『役に立たない』と判断された情報屋が殺されるさまも見せつけ、そして釈放する前に上が用意した魔法道具を体内に埋め込み、これで従順な意にそつ情報を流して世界を操作する情報屋の出来上がりである。

そんな情報屋の大半は魔法世界へ帰つて行つたが、当然ここに残る者も居るのでそれらは「ユーゲート魔法監獄」とつて安全な情報屋だった。

「この写真を見て下れ。」

渡された写真を見れば、在り来たりな風景にも見えたが、アランの指差す先を見つめてニックは息を飲んだ。そこには画面半分で見切れているが、後頭部をこちらに向ける少女と銀の髪飾りに少々隠れてはいるものの、まさに捜しているアルベール？カモミールがそこに居たのだ。

「どうだここは！」

「以前収監したおこじょ協会の幹部だったおこじょ妖精に探らせたんですが、どうにも日本らしいですね。しかも、脱獄して隠れるならまだしも、あの野郎はそこで仮契約までさせてるようです。」

憎々しいとばかりにアランはおこじょ\$の振込先とされる、日本の地名が書かれた領収書をニックに差し出す。それを受け取り振込先を見てみれば、歯が碎けんばかりに食い縛つてから力が抜けたように背もたれに倒れ込み、上の空でため息を吐いた。

そこには埼玉県麻帆良市と書かれており、少し自信がないながらもニックの記憶が正しければ、その地は関東魔法協会の管轄地だつたはずである。

そうなれば、本来の流れは簡単だ。まずはウェールズ魔法協会へ脱獄の事実と脱獄囚の足取りを報告し、ウェールズ魔法協会から関東魔法協会へと脱獄囚の引き渡しを要請すればいいだけなのだが、ことはそう単純でない。

### 3話 知るもの知られるもの

関東魔法協会のお膝元である麻帆良へ向かうべく、あれからアランは日本へ渡るべく準備に追われていた。

入念な準備には時間がかかる。これが、もし日本への観光旅行か何かであれば、それほど入念な準備は必要ないだろう。

だが、これはそこまで難易度が高くなからうと、隠密性まで要求される任務なのである。そう考えるとこちらの侵入がバレた場合に備え、本名であるアラン・クビサで日本へ渡る訳にもいかず、その道の専門家から偽名のパスポート等を用意させるのに時間が必要だつた。

他にもどれだけ滞在するかわからないので、それなりの荷物を準備する必要もあつたし、所長からセーフハウス用に結界を張る魔法道具や転移道具を受け取り、未だに関東魔法協会から脱獄囚に関する音沙汰が無い事を確認してから日本へ向かった。

日本の成田空港に着いてから驚いたのは、今更ながら東洋人が多くて驚いたのだが、これは余談に過ぎない。

とりあえず、麻帆良から遠すぎず、しかし近すぎやしないかと思いつつ、大宮という街にイギリスから予約しておいたホテルがあるので、先にそこへ寄つて荷物を置いてから目的地へ向かう。

とはいえ、今日からすぐに麻帆良へ仕掛けるほど大胆でも無謀でもないので、顔を知られていない日本の情報屋をあたることにしている。

残念ながらというべきか、もしくは排除されているのかわからぬが、日本には何故か首輪つきの情報屋が居ないので、イギリスの首輪つきから日本の情報屋を紹介してもらつてているのである。

今は既に1件目を回り終え、もう1つの情報屋を求めて低層ビルの小さな保険会社に入っていた。ちなみに、残念ながら1件目は最近廃業したのかさせられたのか、そこに居なかつたので情報は得

られていない。

「いらっしゃい」

店に入るとカウンター越しに、客商売といつには愛想の無むをぎる男から声をかけられた。

店内には他に誰も居ないとはいって、事務机に向かって座った冴えない男は無精髪を生やした顎を撫でつつ、開かれた新聞を片手に足を組ながら、特にこちらを見るわけでもなく「いらっしゃい」と言ったのだ。

これが通常の会社だったならば、もうこの時点で客は店から立ち去るだろ。日本では違うのかかもしれないが、イギリスの保険会社とは信用商売であり、それを損なうということは商売ができると言つても過言ではない。

と、ここまで色々と言つておきながら、そもそも自分が保険云々で来たわけではないと思い出し、カウンターから紹介状代わりに渡されていた割り符を見せれば、男は得心がいったとばかりに立ち上がり個室へと案内した。

「どうも、私はここで情報屋をやつてる鈴木です」

「Uの写真について幾つか聞きたい」

ソファーに座つて出された紅茶には手をつけず、真っ直ぐに「失礼」と言って写真を受け取る鈴木の顔を見る。

先程は冴えないと評した目鼻は鋭く、写真を睨む彼は先程の彼とはまさしく別人ではないかと、わかつていながらもその落差に驚いてしまった。

「これは…… 街並みと遠巻きに見ても判別できる巨大な樹は、十

中十九で麻帆良の市街地ではないかと」

「こちらを見ながら、懇切丁寧に写真の部分部分を指差し説明する鈴木だが、この時アランは不幸にもその写真を見た鈴木が眉を軽く顰めたのに気付けなかつた。

だからこつして試したわけではないが、わかつている事を聞いて求めていた答えが得られたとばかりに、本来の目的である次の議題へと移つてしまつたのだ。

「麻帆良だというのは、こちらでも把握している。問題はこの少女だ、この少女についてこれで得られるだけ教えて欲しい」

カバンから厚さにして1cmの束を取り出し、黙つてそれを机に置いた。

事務的な手続きなんだろうが、それを受け取つた鈴木は相談室に備え付けの機械に放り込むと、束にされていた1万円札の枚数と真贋をあらためだし、部屋を機械の音が短時間だが支配した。

「全部本物で100万円ですが、この少女にそんな価値が？」

今度はわかりやすく鈴木が怪訝な表情をしたため、表情を読み取れたアランは在り来たりに「詮索はするな」と口にすると、それも商売だとばかりに鈴木は疑問を取り下げてソファーに戻つた。

「仕事は引き受けますが、この情報は急ぎで？」

「払つた報酬に価格が上乗せされない程度には急ぎで頼む」

金には煩いアランとしては、100万も払つたのに急かしたせいで特別料金が発生し、払つた報酬の何割かをその料金が差つ引いた

せいで情報精度が下がるのは嫌だつた。

だからといって、時間的猶予があるわけでもないので、急げる分は急いで欲しいのである。

「それでしたら、4日後……いや、3日後の昼にでも来て下さい」

「わかった。期待している」

これで日本すべき任務の第1段階が終了したと、内心胸を撫で下ろしながらアランは立ち上がり、そのまま今日は一度休もうとホテルへ向かつて行つた。

そんなアランを内心複雑そうな目で鈴木は見送りつつ、[写真の少女を探すべく麻帆良の親元である関東魔法協会から公開可能な内容として開示されている資料を読む。

今でこそこんな立場に甘んじているが、昔の鈴木は日本でもやつての情報屋だった。

いや、名つてという部分に関しては今もだが、情報屋として情報収集に全力をかけていた結果として関東魔法協会に首輪を付けられ、今となつては麻帆良について聞かれたら関東魔法協会が安全だとする情報を流さないとならない。

例えば警備体制のような根幹は、田々あちらから曖昧なものや本物どころかガセまで送られて来て、それを密に流す事になつていて。人物に関してもそうで、魔法先生や魔法生徒の情報も入つてくるが、どこまでが本当でどこからが嘘だかわかつたもんじゃない。だいたい”関西”から来た『近衛』が魔法生徒でないならば、いつたい誰が魔法や氣を使うと言うのだ。

忌々しい事に、自分が飼われてるのも鈴木には理解できた。情報屋としての鈴木を信頼する客を裏切つていても、腸が煮えくり返る思いでわかつたいた。そして、逃げたら消される事を誰よりも鈴木自身が理解していた。

「ちつ。 それにしても、この少女は……」

確かに近衛と同室に住み、一般人のリストに入っていた少女の筈だが。 手を出す価値があるか無いかで言えば、後見人が近衛近右衛門なので要求や交渉の材料にはなるだろうが、逆に言えばそれは近衛近右衛門を ひいては関東魔法協会を感情面からも敵に回すということになる。

リスクとリターンが割りに合わないとは思うが、彼には何かしらの勝算があるのだろう。 狹い範囲でしかできないが、そんな彼のサポートを出来るのは自分だけしかない。

とはいえ、敵対行為をとれば消されかねない現状としては、両親が死去している事やバイトをしているという薄い情報だけでは足りないので、久しぶりだが能動的に動いてみようと鈴木は考えていた。

例の保険会社の相談室で、一枚の紙切れを挟んでソファーに座る2人の男は唸っていた。

1人はこの部屋の主にして、この数日で髭も伸び目の人下に隈まで拵えて益々客商売に向かない鈴木である。

あれから知り合いの情報屋に鈴木自身当たってみたが、まるで検討違いだと言わんばかりに『神楽坂明日菜』の情報に変化がなく、もしかすると自分はバカだつたんじゃないかと唸っていた。

もう1人は鈴木とは対照的に、目鼻立ちがそれなりにいいアランだった。

あれからアランは別名義で違うホテルにダミーの部屋を2つ借り、群馬の山中にセーフハウスにはもつてこいの小屋を見付けたので結界の設置を済ませていたのだが、後見人以外はあまりにも普通でし

かない『神楽坂明日菜』という少女に嘆息し、肩のおこじょは「最近出たらしげがペットか何かじゃないか」という言葉に納得し、同室と書かれた『ネギ？スプリングフィールド』の文字に唸つっていた。

「悪いが情報はこれだけだ」

「普通の少女だな」

結局あれだけ努力して探して、これだけの情報となると99%は普通の少女である。残りの1%はまず無いだろうが、途方もない情報統制がかけられている場合だ。

大外れを食らった鈴木からしてみれば、今回の依頼は努力が無駄になつて迷惑もいいところだが、逆にアランからしてみればネギ？スプリングフィールドにだけ注意すれば問題がないとわかつて安心していた。

とはいゝ、今は人畜無害なペットでしかないが、そのペットが脱獄囚だとバレる前に捕縛しなければならない。

「ありがとう。私はこれから報告があるから、行かせてもらうよ。次も何かあつたらよろしく頼む」

「努力も無駄になつたとなれば、あんたは次から特別料金だ畜生」

後ろからグチグチと何かが聞こえてくるのを流しつつ、ホテルで所長になんと説明しようかアランは考えながら、イギリス料理の万倍は美味しい飯を求めて去つて行つたのだつた。

その頃、関東魔法協会のお膝元である麻帆良学園は、日々に例を

みないほど不穏な空氣に包まれていた。

正義に燃える魔法先生も魔法生徒も、その伝説に怯える魔法先生も魔法生徒も、英雄候補を抱える故に過保護になる魔法生徒も、桜通りで起きた事件への対処についてぶつかり合い、事件現場よりも空気が軋んでいる。

犯人がわかつてゐるといふのに、誰にも手が出せない。 その事はとてももどかしく、とても苛立つてくる。

だが、そんな事は彼等には関係なかつた。 伝説を知り化物を知り、なおかつ実力も知つた上で彼女の本質だけを見る者達は、悪を語る彼女が女子供を殺さないと知つていた。

だからこそ、彼等にとつてエヴァンジェリンの事は些末な問題であり、むしろコレの方が問題だつた。

関東魔法協会には数々の飼い犬があり、その内の1匹が噛みついたのだ。 いや、甘噛みにも満たなかつたようだが、『ネギ？スプリングフィールド』ではなく、しかも『近衛木乃香』でもなく、未だまつたくの一般人で通している『神楽坂明日菜』について嗅ぎわまつたのだ。

影すら踏めなかつたようだが、目的も理由もわからないが『神楽坂明日菜』について嗅ぎわまわる人物が居るというほうが、近衛近右衛門や高畠にとつて問題だつた。

## 4話 行ぐもの行かせるもの

荒い息を抑え、ニックは突つ伏すように所長室に拵えられた机に倒れ込んでいた。

既に机の上に置かれた物は何もなく、紙は四方にばらまかれ電話は壁に投げつけてある。こんな事が根本的な解決にならないとはわかつているが、それでも物に当たり散らしたくなる時もある。

報告として話を聞くかぎり、よりもよってあのおこじょ妖精は、あの脱獄囚は、あのクズは一般人をたぶらかし、極東の火種である『近衛木乃香』と、ウェールズ魔法協会と関東魔法協会の確執である『ネギ？スプリングフィールド』にわたりをつけてしまった可能性があるのだ。

それは不味い、それは駄目だ、それは許される事ではない。言つてしまえば、一般人が脱獄囚という我々を殺しきれる爆弾を片手に、世界でも上から数えた方が早い火薬庫でランデブーをすれば、見つかると同時にこちらを巻き込んでドカンと爆発し、更には火薬に引火して大惨事を引き起こすだろう。

もちろん、場合によつては大惨事の全容があきらかになるまで生きていけない可能性もあるが、せめて自分くらいは生きていけると信じたいニックであった。

現実逃避はさておき、今は関東魔法協会が何を考えているのか読み取るべく、全力を尽くすべきだろう。問題なのは脱獄囚の侵入を理解しているか否かであり、侵入を理解している場合は何故こちらに掛け合つてこないか、また知らない可能性は本当にはないかを考える。

もしも脱獄囚の侵入を理解していたとして、それを外に漏らさないメリットとは何だろうか？一番可能性が高いのは、『ネギ？スプリングフィールド』の存在によるウェールズ魔法協会との確執に、こちらの失態を手札として隠す場合だ。

つい最近やつと聞かされた愚痴を思い出したのだが、本来ならば英雄候補である『ネギ？スプリングフィールド』はウエルズ魔法協会圏内か、そのまますぐにでも魔法世界に連れて行くのかで議論が別れていたのだが、メルディアナの学園長が長年の友誼がある関東魔法協会の長である近衛近右衛門と独自に繋がり、独断で英雄候補を譲り渡した事は、未だにウエルズ魔法協会でも魔法世界でもしこりとして残っている。

そんな友好的とは言い難い相手の失態を知ったとなれば、最も高く使える時がくるまで脱獄囚の存在は切らないだろう。だから、関東魔法協会が何も言つてこないのかもしれない。

だとすれば最悪の事態を即座には免れられるが、一いちらとしては最後に残つた首の皮すら関東魔法協会に掴まれていことになり、今日からまたいつ首を斬られるかびくびくして過ごさないとならない。

「だが、本当に知つているのか？」

愚痴にあつた関東魔法協会を要約するに、奴等は『ネギ？スプリングフィールド』を金の卵を産む鶏として飼つてゐるわけでもなく、今後の成長に絡んで地位向上や権益拡大の駒として見てゐるわけもなく、なんとも馬鹿正直というか字面通り英雄候補として迎え入れてゐるらしかつた。

正義の魔法使いを目指す者が多く、更には自分が正義だと思つてゐる輩が、そんな英雄候補に悪い虫どころか脱獄囚が近づいていると知つて、黙つていられるだらうか？

上の引き締めがどの程度かわからないが、末端まで脱獄囚を黙る事はできないだろうし、できないならば情報が漏れている事を鑑みれば、これはもしかすると都合のいいことにまだバレていかない可能性がある。

いくら脱獄囚が大胆不敵によその魔法協会へ逃げる胆力があると

はいえ、馬鹿じゃなければ周囲に魔法使いが居ようと黙つてペットに成りきり、その場で雌伏を続けるだろう。それこそ、多少なりとも賢しければバレたら最後、こちらへ引き渡される事はわかるだろうから。

「……電話は買いなおしだな」

あまりにも短絡的な自分の行動に自嘲しつつ、大きく溜め息を吐きながら机の周囲に散らばった資料を集め、今一度ゆっくりと読み返す。

この資料は面倒を承知で、事情を隠しつつあちこちから静かにゆっくりと集めたもので、おかげさまでいっこうに情報は増えないなだが、こちらが関東魔法協会の情報を欲していることもバレていなはずである。

それはさておき、資料によれば麻帆良には巨大で厳重な結界が敷かれ、結界を軸にした防衛体制が配置されているらしかった。

結界の機能には大都市のど真ん中に魔法使いを住ます為か、かなり強力な認識阻害が込められているようで、そこでなるほど一般人の少女に脱獄囚が近づいても、少女が驚かないのも頷ける。

さらには当然ながら、侵入者の感知をすることも可能のようだが、やはり防衛の根幹に関わるこのあたりの事情は機密にあたるので、『悪意あるものの感知』と『正規ルート以外からの侵入』ぐらいしか情報が得られなかつた。

こちらも侵入を考えている以上は、できれば感知できる悪意の定義を知りたかったし、悪意を持って正規ルートに入るといった抜け道があるのかが重要だったのだが、そこは諦めるしかないだろう。

この情報としては抜け道も重要だが、何よりも特に悪意の定義が重要だった。感知するのは人に対する悪意なのか、物に対する悪意なのかそれとも組織に対する悪意なのか…… 例えは何かを追つていたら追跡対象が入つてしまい、それに追走して入つたら組織外の

者であれ悪意を感じてしまうのか。

我々としては関東魔法協会に対して、侵入せざるを得ないという負い目こそあるものの、特別悪意を抱いているわけではない。となれば、それはよそ者同士の小競り合いでしかない。

あくまで感知する悪意の定義がわからない為に確信は禁物だが、曰ひぼしされる可能性だってなきにしもあらずだ。いや、むしろ全てを感知しているならば、内部で問題を起こすとはいえ内部に問題を起こすわけじゃないから無視されるだろうし、逆に感知基準が定められているならば、感知され難いだろう。

「だとすれば……正面からが一番か」

取り出した麻帆良学園の見取図にある、大きな橋を指差しそつと顎に手を触れる。正面から堂々と、胸を張つて肩を威張らせ風をきり、麻帆良の使い手が正義の美酒に泥酔しているところを、素知らぬ顔で我が物顔で脱獄囚を捕縛する。

気付いた頃には後の祭り、何が無いかわからない。居ないものはあつても無くともわからない。

少しばかり問題があるとすれば、脱獄囚を知らず匿つた少女の居場所がわからず、正面から入つて捜している内にこちらの尻尾が掴まれかねないということ。

必ずそこに居て、必ずそこを田指せば出会える地点が欲しい。

報告としてアランから送られてきた資料を見ても、この神楽坂という少女の行動に癖がない。

どうせならば、毎週何曜日は へ必ず寄るといった癖があれば、追跡も待ち伏せも監視も楽だというのに、少女にはそれがない。

だとすれば、確實に居る場所は寮か通学路、もしくは学校の3ヶ所では必ず捕捉できるだろう。

とはいえ、庭に入るだけでも好ましくないというのに、要塞と言つて過言ではない学校内部に入るわけにはいかない。

しかし、かといって一発勝負である以上は、どのタイミングで登校するのかわからない少女を待ち伏せするには難しく、周囲の目も邪魔になる。

当然最後の地点である寮も、それこそ監視の目が張り巡らされている筈だ。

「どれもこれも虎口か」

相手が虎よりも狡猾で獰猛な魔法使いであり、まさに必殺空間と言つべき配置をとつてゐるであろう事を考へると、虎口より竜口の方が脅威度的には近い。

如何にその脅威度を抑制し、安全にことをなすかが問題であるのだが……これを利用するか。

資料に書かれた『全体停電』の文字を見て、眉間に皺が寄つてくるのがわかる。日付は残り1週間もない4月22日で、時間については夜間と書かれているのだが、詳細には書かれていない。

電子的な警備体制が沈黙し、警戒度が上がつていようとそ者同士の小競り合いとなれば、当然ながら優先順位は低い。ここに出し抜けければ、問題なく脱獄囚の捕縛と脱出は可能だろう。

となると、停電してから即座に侵入するとなれば、相手から無用の警戒を買うだらうから、少しばかり時間をみてから侵入すべきだ。あとは、少女の記憶に関してだが、まあ認識阻害によつてどうにでもなるだらうから、顔を見られた場合を除いて手をつける必要はない。むしろ、手をつけたせいで搜査に本腰を入れられても困る。侵入に関する指示で必要なのはこれくらいだらうか？ 指示には執拗に『穩便に動け』と書いたし、『交戦は断固回避せよ』とも書いてある。

これくらいだらうと軽く頷き、ニックは静かにそれをわかりやすく紙に書き記していく。指示は最後の引金だ…… 絶対に失敗は許されないだらう。

車のハンドルを小突きながら、心を苛む緊張を打ち消すようにアランは大きく深呼吸した。

何度もなくウエールズから届いた紙切れを読み返し、所長の意図を可能な限り読み取り、何度も何度も脳内でシミュレートを行なつてきた。

情報を得る努力だつて怠らず、麻帆良の詳細地図を書き集め、停電時間の詳細についてだつて嗅ぎ回つた。

地図は麻帆良の学校紹介パンフレットや、手に入った幾つかの写真から中を想像するしかない。これは、侵入者の魔力波長等が記録されていた場合、2度目3度目となれば脅威度が高いと考えられるのを防ぐ為である。

停電の時間に關しても、残念ながら詳細を得るには至らなかつた。対外的な停電のアナウンスは日付だけであり、時間は秘匿され例年では朝か夕方か夜におこなわれ、朝の通学時間や昼から夕方にかけての学校が開いている時間は回避されたり。

それについての情報は少ない。むしろ、ほぼ無いと言つて等しいだろう。

この国における情報源として、保険屋に扮する鈴木という男をアランは頼つていたのだが、ある口突然前触れさえなく鈴木は蒸発していた。

そのせいで情報は極端に薄くなり、だからと言って新たな情報屋と信頼関係を結ぶような時間もなく、更には生来の拝金主義もあって財布が硬くなつた結果として、核心に近い情報はあれから得られなかつたのだった。

## 5話 入るもの入られるもの

小さな一室に、大げさなまでにつんざくアラームが鳴り響く。あまりの音にアランは顔を顰めつつ、鳴り響くアラームを止めてから呼吸を整え、ハンドルを握りなおしてからゆっくりとアクセルを踏んでいく。

このまま行けば、当初の予定通りの時間に到着するだろう。到着予定時刻は23時30分、得られた情報から推察すると まだ停電開始の情報が流れてないからだが 夜に行われることは確定で、時間も21時から25時の4時間だと考えられる。

故に侵入の決行は急ぎすぎず、されど事がなせないほど遅すぎない時間を選び、停電終了の1時間30分前である23時30分と決めていた。

突入に際して気にすべき事は少なく、内側からの侵入や脱出にする手引きはない。武器と呼べるような物は緊急時の杖代わりに、魔法発動体の指輪をついているだけで、銃火器はおろか刃物すら持っていない。

これは、まかり間違つてアランが拿捕された場合を考え、二ツクが画面でアランに指示したものである。もしも拿捕された際に、アランが重装備だった場合はどうやっても角がたち、最悪ウエールズ魔法協会と関東魔法協会の外交問題になる。

外交問題にまで発展する頃にはニック自身は殺されているだろうと思つているが、助かる可能性が1%でもあるものを絶やす気はない。

「 次を左か」

カーナビを何度も確認し、『麻帆良』と書かれた道路標識をまがれば、ここからも見えるがあとは橋まで一直線である。

じつとりとハンドルを握る手をベタつく汗が覆い、適度とはかけ離れた緊張感に口内から唾がなくなっていく。

敵地が…… そう、敵地が目前なのだ。より正確に言えば日本という国そのものが敵地であり、麻帆良はその本丸に当たる場所である。

失敗は許されない。見付かるだけならばまだしも、捕まる事だけは絶対に許されない。

情報源を失つてからも精力的に調べてきた結果、関東魔法協会は今までの楽観視を少し改める程度には厳しい組織らしい。

幸か不幸か いや不幸だらうな 関東魔法協会に侵入して捕まつた事例は多いようで、数多の事例を紐解けば、捕まつた大半は頭ないし体を弄られて魔法使いや裏の世界から完全に絶たれるか、悪い場合では行方不明も起きているらしい。

本当に無いのか隠したか揉み消したわからないが、調べた限りではよその魔法協会やらそれに類する組織からの侵入し、そこで捕まりどうなるのかという事例が無かつた事が不安と言えば不安である。橋の手前にあるコンビニ前に車を停め、ここからは徒歩で川を渡り麻帆良の地へ入る事になる。

これは停電した麻帆良へ車で入り、ヘッドライトにより位置を関東魔法協会に伝えないためである。ライトを消す事も考えはしたが、正直に言つて停電中の街を無灯火で走る車は不審車でしかないのだ。

部外者が停電中に単独で関東魔法協会のお膝元である麻帆良を歩くのも十分に不審だが、まあそれはこちらを感知できればの話ではあるが。結界によつて感知さえされなければ、いくら優秀だらうと一般人の顔を全て知つているわけでもないだろうから、不審とはいえ警戒はされまい。

橋を渡る足に力が入る。既に橋の1／4を渡りきり、あと数歩で麻帆良を覆う結界に入る所まで来ている。

目の前に見える暗い静かな都市は、夜の喧騒とは程遠く無音の世

界である。

「行く、か」

最後に自分を鼓舞するように言葉を漏らし、その1歩を踏み出し絶句した。

肌を焼き焦がすような魔力の波…… それだけで簡単に換算しても、既に自分数人分にも及ぶだろう。

空を貫き地を穿つ魔法など、才が豊かでない自分では逆立ちしようと撃てはしない。それだけの魔力の奔流 いや濁流とも言うべき魔力は、しかしその総量に圧倒されがちだが一切乱れる事なく、正しくその目的の為に制御され尽くされている。

悪夢だ…… 神か魔か誰の惡意かまでは理解したくもないが、入つてすぐに出会つたこれは不味いにも程がある。

戦いの推移はわからないが、この場で戦つているとなればどちらかは確実に関東魔法協会の人間であり、ここまで派手に戦つていれば隠れて戦つっていても来るだろうが 必ず増援がくるだろう。不味い不味い不味い、結界の強度も結界内とはいえ外縁ギリギリで行われているこれだけの戦いが、外からはその魔力どころか残らず感じ取れないとなると、それ以外の分野も想定より数倍だと考えた方がいい。

どうする？ 進むか逃げるか…… どちらか見極めて侵入者の援護をして撃退する事も考えられるが、自分とは桁が3つ4つ違う実力者を援護する技術などあるはずがなく、まかり間違つて援護できただとしてもこの戦力差じや対等には程遠く、主導権を握られ凹して捨てられるのが関の山だろう。そこでふと、頭の中の知識に引っかかるものがあった。

「ネギ…… スプリング、フィールド！」

空を飛ぶ金髪の方はわからないが、たしかにあの圧されてる少年はこの関東魔法協会で最も近付くべきではない少年、まさしく弱点にして地雷であるネギ？スプリングフィールドである。

接近すら控えているものを、接触なんてした日には話しにもならない。アランは作戦を撤退に切り換え、まだ1歩しか侵入していない麻帆良から尻尾を巻いて逃げ出した。

本人はそれが有り得ないと知らないのでしょうかがないが、最終的に撤退を決意したのはネギと戦うエヴァンジェリンと視線があつたことで、弾除けの囮にされると考えたからである。

当然ながらエヴァンジェリンにそんなつまらない考えはなく、もう一步でも一瞬でもアランが進むか残るかすれば、ネギと戦う片手間に処分するつもりであったのだが、運よくアランの撤退の判断はエヴァンジェリンの機先を制する形になつたのだ。

麻帆良から出られないエヴァンジェリンからしてみれば、実力者でもないアランなど無害でしかない。逃げようが逃げまいが気にならない。

もう少し言葉を足すならば、麻帆良から逃げられてしまえばエヴァンジェリンに打つ手はなく、最強の魔法使いだろうと悪の吸血鬼だろうと無害な少女でしかないので、手を出したいような相手でも出せなかつた。

だからしようがないから田をつむろつ、手を出さないなら無視しようと言つほど関東魔法協会も優しくはない。

最初こそ正面から入つた事と魔力量の低さから、英雄候補のネギと悪の魔法使いであるエヴァンジェリンの戦いを静観していた魔法先生たちは、橋に現れた侵入者のアランを一般人の闖入者だと感じていた。

判断材料は様々だが、まず魔力量が低すぎる事から魔法使いではない、もしくは麻帆良を狙っていないと考えた魔法先生が居た。

そして、何をするでもなく麻帆良の結界に一步踏み込んだだけで、ネギとエヴァンジェリンの戦いを見て逃げ出したことから、認識阻

害にかかりきる前に魔法を見て逃げ出したと考えた魔法先生も居た。なにより、戦闘の推移を見極めつつはあるが、エヴァンジエリンが勝ちそうになれば予定より早めて24時前にも停電を解除しようとしているのに、まさに街に電灯が点き始める寸前に正面から入る侵入者が居るだろうか？

「学園長」

「……うむ」

しかし、もしもネギかエヴァンジエリンのどちらかに何かあつた時の為に橋の上から見ていた高畠は、睨み付けるように逃げ出すアランの背中をみつめていた。

エヴァンジエリンの性格を熟知している高畠だったが、何事にも万が一というものはある。

怪我が極力起こらないように様々なるルールや制約で縛った競技でさえ、場合によつては死亡事故にまで至つてしまつというのに、殺す予定のない殺し合い　要するに喧嘩で事故が起きてしまつたら、行き着く先は怪我で済むかどうか。

本来ならば侵入者を叩く遊撃戦力でなければならぬものを、学園長に頼み込む形で現地に入り偶々アランの顔を見ていた高畠と、遠見でその顔を見ていた近右衛門の頭には、あれ以来2人の中に刻まれたリストの上位に加えられた男の顔が浮かんでくる。

撒き餌であつた鈴木修一郎を呼び出してから捕らえ、既に幾日も経つてはいるが未だにあの男の名前を吐いていない。いや、鈴木は職業柄か気質かわからないが、客の名前を聞くことは稀であり、頭を壊れるまで弄つても吐かない時点ではわかっていた。

他の情報屋にもそれとなく当たつてみたが、彼は会う情報屋について名前を使い分けているようで、ドイツ人のグレイード？ジークフリート？ホイス、イギリス人のサディアス？エルバート？デューア、

スペイン人のエメリコ？ソラ？トレビニョ、そしてロシア人のシードル？ヤロスラヴォヴィチ？ブトケエフ。

恐らくはどれも偽名だろう。既に入国者リストをひっくり返してみたが、リストにそんな名前は存在しなかった。

つまらない手だが、日本人は外人を見て欧洲系かアジア系かといった区別はできるが、欧洲のどこの国か識別するのが得意とは言えない。そんなところを突く狡猾さもある。

声も翻訳魔法を介しての声で言語はわからず、こちらから手を出でか迷っていたのだが、停電について積極的に嗅ぎ回っていたので放置しておいたというのに、何故この神楽坂明日菜が橋に居るタイミングを読めたのか、そして何故手ぶらで逃げ出したのか。

「高畠君、窓まで追つてもうらえるかの？」

「言われなければ独断でも行きますよ」

静かに消える高畠を見て、近右衛門は既に明るくなつた学園長室で椅子に寄りかかり、暖かい眼差しでネギに助けられたエヴァンジエルンを見てから、隣の神楽坂に視線を向けてから溜め息を吐いた。神楽坂の情報が関東魔法協会のどこから漏れたのか、それとも相手に読まれた結果なのか……組織のトップとは面倒な舵取りもあって気苦労が絶えないが、情報の漏洩源がここなのか精査する間は根本的に仲間を信用さえ出来ない。

辛いと言つよりは疲れると定められた未来に顔を顰め、できる事なら彼の窓から高畠が全てを引き出して来てくれる信じ、これから魔法先生によって行われるだろうエヴァンジエルンへの糾弾と、それを上手く纏める言葉を考えながらも近右衛門は高畠からの朗報を願つて止まなかつた。

## 6話 詰むもの詰まれるもの

右へ大回りし左へ遠回りし、できるだけ目的地を知られないうに、できるだけ居たらだが追跡者を撇くよう縦横無尽に車を転がし、ただただアランは全力をもつてセーフハウスへ逃げていた。

「くそったれ！ くそったれえ！」

逃走車となつた車の中は、感受性の高い人間が居たら気分が悪くなるほどの悪意に染まり、一般教養のある人間が乗れば顔を顰めるほどの罵詈雑言で溢れかえつている。

これが逃走車でなく、しかも人目が無ければ今すぐにでも車を降り、怒りの向くままに車を魔法で破壊したいぐらいだつた。

怒り心頭といった面持ちのアランだが、彼の感情を正確に表すならばそれは怒りではなく、色々どじけや混ぜになつてゐるが恐怖に過ぎない。

敵の本拠地に入るという緊張感があつた。 任務に成功し、ウヘルズで栄達する未来があつた。

そんな潜入任務にしては初々しい感情は、麻帆良の地に一歩入つただけで粉砕された。

侵入にあたり、予想だにしなかつた大橋で行われたネギとエヴァンジエリンの戦闘は、少なからずアランの精神に負荷を与えていた。例えばあれば、在り来たりな才能同士の戦いや、せめて戦巧者の戦いであればアランにも理解はできなくとも、自身のうちに噛み砕いて処理する事は可能だつた。

しかし、しかしだ。 戦巧者が確認する暇こそなかつたとはいえ、あの一瞬に一瞥さえできれば圧倒的なまでの才能だけは見てとれる。脳が理解を拒む程の才能差は、蟻と象を大きく上回り最早怪獣映画の領域にまで差し迫る。

アランとて魔法使いであり、アランとて裏の人間である。だが、文武で言えば文の人間であり、まともに前線に行くどころか戦闘もこなした事がない。

そんなアランの前での戦闘が、よりによつて雲間に霞む才能同士の戦いとなれば、生存本能に従つて恐怖のあまり逃げるのは当然である。

精神を苛む恐怖に打ち克つ為に、アランの精神が無意識に持ち出したのは怒りの感情だつた。 恐怖を忘れる程の怒りを必要としたが、それにああつらえ向きの矛先があつたのだ。

「くそつ！ ふざけた情報を掴ませやがつて肩が！」

情報屋と顧客の間に最も必要なもの、それは信頼関係である。

情報屋は顧客の信頼を得る為、顧客の情報を流す事はない。 顧客も情報屋の信頼を得る為、情報源について漏らさない。

情報屋は顧客を信頼し、重要な情報を顧客に流していく。 顧客は情報屋を信頼し、得た情報によつて動いていく。

日本に来て最初に手に入れた情報屋は、あの割り符こそが信頼に足る証となり、悪くとも必ず信用はされる物だつた。だからこそ、情報源として利用していたのだが、ヘマをしたのかまではわからぬいが途中で消されてしまった。

異国之地で情報源を失い、今更他の情報屋を捕まえて信頼を得るのもするのも難しく、後はこちらを隠しつつ情報屋を周り続けるしか手はなかつたのだ。

名前を変え攬乱し、翌日のメニューに自分の名前が載つても困らないよう細工した。 集めた情報を解析し、停電時間は25時までだろうと当たりをつけた。

そして、突入したらあのまだ。 戰いから背を向けた瞬間に、麻帆良の地に灯りが点いたのを見逃す事などできなかつた。 故に自分の解析は棚に上げ、ガセを掴まされた屈辱と情報屋に対する怒

りに燃えていた。

「もつ一度あそこへ行くなんて[冗談じやないぞー」

周囲の明かりも少ない群馬山中になると、そのまま用意していたセーフハウスである山小屋へ転がるように飛び込んだ。地を這うようにして山小屋に入ると、出国の際ニック事前に用意されていた魔法道具を起動させ、四方の壁を要塞の如く堅牢さを持たせてから、早く出ると願いつつ電話を手に取った。

『 私だ』

「ヴィルヌーヴ所長！ この任務は私には…… 私には無理です！」

受話器から聞こえた声にすがり付き、玩具をねだる幼児の如く感情的に声をあげ、とにかく過程や結果を口にせず要求のみを喚き散らす。

アランの中の冷静な部分が、今更ながら偶々麻帆良で見てしまった少年と少女の戦いが、あまりにも異常過ぎたせいか心的外傷にでもなっているのかと自嘲し、たぶん電話口に居るヴィルヌーヴ所長は眉を顰めつつも現状を理解しただろうと予想していた。

冷静な部分が導きだしたその見立ては正しく、電話口で急に怒鳴るように喚くアランの声を聞いたニックは眉を顰め、しかし用意した2つの時計のうち日本時間を示す時計を見てから眉間に揉んで黙り込む。

本来の電話による戦果の確認は、これからまだ1時間以上あとの事だった。となると、電話が来て最初にニックが考えたのは、余りにも早すぎたので大成功か大失敗かのどちらかだった。

大成功なら1時間前倒しだらうが、もっと前から電話があつても文句を言つどころか感謝の言葉が溢れるだらう。

急いで関東魔法協会への突入をしたのか、それとも侵入する前に捕縛できたからこそ連絡が早かつたのか問いただし、侵入という問題すら起こさずに捕縛したのならば、帰国後に珍しく秘蔵の高級ワインを振る舞つてやりたいぐらいだ。

しかし、大失敗ならば話は別だが、もとよりニックはこの電話が大失敗を伝えるものである可能性は少ないと考えていた。

あれだけ楽観的な考えをもつニックだったが、楽観的なだけでは今まで生きてこられない。部下の能力を把握しているニックからしてみれば、あのアランが何らかの大失敗を犯した上で逃げ帰れるとは考えておらず、大失敗はアランからの連絡が無いか上からこちらに連絡がくるかどちらかだと考えていたのだった。

だから緊張感少なく電話を受けたニックは、しかしその予測を裏切る結果に顔を顰めていたのだ。

「麻帆良で何があった？」

『実は』

切迫したアランの説明を聞く毎に、ニックの眉間の皺が深く刻まれていく。この時、事態を説明するアランとニックの間には、決して埋められない溝があつた。

それは簡単なもので、実際にそれを見たか見てないかによる認識の違いである。

アランからしてみれば、自身の魔力量など嵐に呑まれる木の葉程度のものでしかないと否応なしに理解させられ、外見こそ子供同士の戦いでしかなくとも一瞥でもされれば潰されるという威圧感をうけ、その恐怖によって逃げ出したのだ。

だが、その戦いをニックは見ていない。どうせ麻帆良に入ったはいいが、中で戦闘を目の当たりにして臆病風に吹かれ、逃げ出した上に面倒なプライドから変なこじつけに走ったのだと考えてしま

つた。

もしもだが、あの場に居たのがアランではなくニックだったとしても逃げ出すだろうが、物事にもしもはなく、ニックにはアランが失態をおかしたという認識しかなかつた。

不幸とは逃げるものを追い続けるもので、ニックが与えた結界を組む魔法道具は、転移用の魔法道具を片手に電話で喚くアランに多大な幸運と小さな不幸を与えた。

そもそも考えて欲しい。金にうるさいニックが、高価で高性能な魔法道具をぽんと渡すだろうか？

転移用の魔法道具は高価な物を渡している。これは、安物で転移が失敗されるのも困るし、逆に転移は出来たが簡単に転移先を探知されるのも困る。これは、後々自分達に返つてくるのだ。

しかしながら、攻められる前提の結界は任務の特性から考えて、絶対に必要になるとは言い切れない。

だからこそ、堅牢でありながらも戦闘者にとつては欠陥品と揶揄される魔法道具を安く買い、それをアランに与える事にした。

高性能だが性能のあまり欠陥品というのが、この結界の難点である。製作者はこれを作るにあたり、堅牢さのみに目を配った。中の人物の気配を漏らさず、中からの音や魔力を遮断する性能はしかし、逆に外に居る人間の気配や音をも遮断してしまい戦闘者には不評だつた。

とはいえ、アランの力量から考えれば、建物の内外を遮断されようがされまいが変化はなく、それより堅牢さの方が重要だとニックは金額と実益から考えていたのだ。

そして、それは正しい。実際にアランは実力が少なく、如何に努力しようと建物の外に誰が居るかわからない。

小さな不幸とはこれであり、外に誰かが居るのがわかるという方に1つ起こらない事象が、この魔法道具によつて0になつたのが小さな不幸である。

では、多大な幸運とは何か？

『だから、もう無理なんで』

「……アラン？　おい、アランビうした！」

急に電話が不通になつた事に驚き、声を張り上げるしか手がないニックは何が起きたかわからないが、起きてはならない事が起きたのだけは理解させられた。

電話を掴んでいたアランは、まさか追跡者が居たとは知らなかつた。知つていたならニックにそれを伝えただろうが、知つていても対処はできなかつただろう。

麻帆良から逃げるアランを追跡していた高畠は、少し時間がかかりながらもこゝうして山小屋に辿り着き、前でエンジンすら止まつていい車と逃げる車が一致する事を確認した。

山小屋の中に明かりは点いておらず、暗い山小屋には人の気配も風の音すら聞こえてこない。

既に転移した可能性も考えるが、逆に麻帆良から即座に逃げるのならばその時点で転移すればいい話である。とはいえ、脳裏に逃げ出しながら転移する力量がない可能性が過るが、小さな証拠すら逃すものかと力を込めて扉に手をかけて　その堅さに驚愕した。

魔力は一切感じない普通の扉だったからこそ、普通の錠前程度ならば捻切る気持で力を込めて捻つたのだが、扉は壁と一体化したかのようにびくともしない。

山間の風景にみあつた自然な木造の山小屋は、しかし今の感触からすると高畠には厳にすら見える堅牢さがあつた。

「それならそれで、やつよつはあるわ」

「」のように堅牢な結界の類いが残されているとなれば、罠でない限り中に誰かが残つて居る可能性は高いと高畠は口の端を歪め、自

らが高めた技量を惜しみなく晒すべく、軽い呼吸とともに両の手に魔力と気を集め始めた。

本来であれば反発しあうそれらであるが、高めた技量に絶対の自信を持つて両手を合わせ、至高ともいうべき技術である咸卦法を身に纏つた。

……アランはまだ、気付いていない。

## 7話 負つもの負わせるもの

荒れ狂う魔力も昂る氣も、それを混ぜて御す高畑の存在も、何もかも知らずにアランは受話器を握りしめていた。

不穏な気配を感じる事はなく、虫の報せも全く感じないアランは、それこそ気付いたら結界ごと山小屋が吹き飛ばされていくのを、何も脳内で処理できず黙つて見つめていた。

音にするならば、ゴンというような音だつたかもしないし、もしくはバンという音だつたかもしない。

音を例えるならば、限界までアクセルをベタ踏みした大型トラック同士が正面からぶつかるような音だつたかもしないし、想像もつかない量のダイナマイトにガソリンをぶちまけてから火を放つた爆発音のようでもあった。

要するに、だ。アランは最高に混乱していた。  
床に尻餅をつきながら、見上げるように啞然としつつ音の鳴らない受話器を耳にあてたまま、呼吸すら止めて静かに発生源へ視線を向ける。

実はこの時、高畑は壁の堅さを過大評価して全力を尽くし、自らの必殺とも言える豪殺居合拳を撃つており、要塞にも似た壁を食い破る豪殺居合拳は壁を破つても力が衰えず、もしあと少しでも結界がもたなかつたならば、アランは壁とともに壊れていただろう。

これこそが、アランが与えられた多大な幸運である。生きている事にくらべれば、膝からあらぬ方向に曲がった右足など不幸の内にも入らない。

「あつ、あつあああんたは……」

写真で見た事のある眼鏡を掛けた優男は、しかしアランの心臓を握り潰す程の威圧感を放ち、黙つて近寄つてくる。

あちこちに壁だつた物や家具だつた物が散らばる中で、逃げようと立ち上がつたアランだが、最初こそ恐怖のあまり何の痛みもなく立ち上がつた。だが、その第一歩を踏みしめる余裕もなく…

：無様に瓦礫へと倒れ込む。

人間は転ぶ時は、反射的に手のひらを地面に向けて倒れるのだが、恐怖に侵食されるあまりアランは右手に球体状の転移用の魔法道具を握り、左手には諸般の事情により”コードレス”になってしまつた受話器を握りしめて、掠れる声にもならぬ声をあげるだけだつた。いや、そんな声も一瞬の事だ。瓦礫に足を取られて転んだばかり思つていたアランが、チラリと足元を見て歪に曲がつた膝を確認してしまつ。

ものには限度や範囲もあるが、傷等は得てして存在に気付かなければ痛みを感じない事が多い。それは、紙によつて指先を切つた事に気付いてから痛みだすことしかり、蚊に食われたのに気づいた途端に痒くなることしかりである。

先程も言つたが、当然限度はある。しかしながら、そんな限度は場面毎に、条件毎に大きく増減していく。

この場面で言えば、『初めての実戦』『敵による急襲』『麻帆良での心的外傷』『圧倒的な敵』他にも様々な条件があるが、それを加味した上でも劣悪な条件以外は存在せず、アランの脳も神経も精神も何かしら今まで全て麻痺していた。

そういう事もあり、自分の目で見てアランは初めて骨折しかも骨が肉を突き破る開放骨折に気付いたのだった。

「ぐつがああああ……足が、足があああ！」

痛みに亀裂が入つてしまえば、後は鱗の入つたダムが如く一気に崩壊してしまう。

大きな怪我なく生きてきたアランからすれば、骨折の痛みはまさに地獄の苦しみである。しかも、普段目にする事のない自身の骨

が見えるとなれば、精神的に苛むものは大きくなつてくる。

掠れた声から悲鳴にシフトチョンジしたアランは、しかし現状において開放骨折程度は細事でしかないという認識を忘れていた。

「ひぐさやああ？」

開放骨折にばかり気を取られていたアランの左足の膝が、本人の目の前でまるで万力で潰したかのように、聞くに耐えない音を響かせて潰れたのだ。

奇襲をしてから数少ない時間が経過しただけだが、それでも高畠はアランの戦力について正当な評価を与えていた。最初こそ余りの引き際に過大評価をしていたが、奇襲により足を怪我してからの混乱ぶりから怪我に耐性がないと言つこと、そしてここは既に戦場であると語るのに握りしめられた受話器 球状の物は不明だが を見て、圧倒的に戦闘経験が無いと見抜いた。

だから戦闘的な思考を切り上げ、痛みに弱い事からより安全でより絶対的に逃がさぬべく、骨折している足とは反対の足を潰す事にして実行に移した。

結果は上々の様で、濁つた悲鳴こそあげはすれど、逃げる素振りは既に残つていなかった。

「悪いけど、僕と一緒に来てもうつよ……君の意志は必要ない」

もう詰んだ。終りだとばかりに、アランの意識を刈り取るべく居合拳を撃とうとしたところで、急にアランの目に光が灯ると右手を動かした。

それに対して、全く高畠が驚かなかつたと言えば嘘になる。高畠に並ぶとまではいかなくとも、相手が強者であれば一拳一投足を見逃さぬ集中力が必要だが、逆に圧倒的に下に位置する相手には集中力が欠けがちである。

アランは高畠と比べるまでもなく弱者である。そして、先程は事実心が折れてしまつた。

的確にそれを嗅ぎとつた高畠は、少なかつた警戒心を更に削ぎ落としてしまつた。アランはそんな高畠の予想を裏切り、そして自らの心を持ち直したのには理由があつた。

恐怖で頭がどうにかなりそうなアランは、偶々あるとはいえたに手放さない右手のそれに気付いた。そこで考え付いてしまつた…… これを使えばこの状況から脱出できるんじゃないかと。

この状況に絶望していたからこそ、思い立つてからの行動は殊更速かつた。この転移用の魔法道具にも大きな長所と短所があつたが、今のアランからすれば長所以外は無いに等しい。

この魔法道具の売りは発動速度であり、球体の中には外からは解らないが転移用の魔法と、それをなすだけの魔力が最初から込められている。転移するのに面倒な詠唱がいらなければ、使用者の魔力すら必要としない優れた1品だ。

使い方も看板に偽りなく、行き先を念じて地面に叩きつけるのみで転移魔法が発動する。だが、当然欠点はあるが、あくまで全てを準備してある分だけ遊びがなく、使つた本人以外は転移させる事ができないが、アランは1人しか居ないうえに高畠を巻き込む事を考えれば今は長所だった。

そんな事は知らなかつた高畠は、不運にもアランの右手を叩き潰すべく動いた。

そうだと知つていたアランは、幸運にも高畠の読みを上回る事に成功した。

「がああぐつききがあー！」

「なつー？」

醜悪な笑み。

言葉にならない声。

回避出来ない一撃。

驚愕の声。

軋む歯。

風の音。

実際に高畠はアランの右手に居合拳を直撃させ、魔法道具を”叩き落とし”た。避ける右手を狙つたが、手には直接当たらないとみて取り落とさせるべく手首を狙いにいつたのだ。

地面にそれを叩きつけようとしているアランを助長するよう、元氣の一撃は確実に手首を碎いて右手の握力を奪っていた。

ある意味では、まさに大金星とも言つべき勝利だった。並べて比べるのが酷だという戦力差を覆し、アランは逃げ切つたのだ。

とはいえ、代償も大きい。両足は既に歩くどころか立つことさえ難しく、右手はまともに動かない癖に痛みだけは伝えてくる始末だった。

だが、それもウェールズにさえ帰れれば、金は掛かるが魔法ですぐに治るものである。

そう、帰れれば、だ。

痛みのあまり淀む思考は、もはやまともに転移用の魔法道具を運用する精神力はなく、発動が早いが故に正しく使わねばならなかつたこれは、残念ながら正常に起動していない。

使い方は先にも書いたが、行き先を強く頭で念じて地面に叩きつけるだけである。だが、痛みに思考が負けたアランの精神は正常とは言い難く、頭のなかには『ウェールズに帰りたい』という強い願いよりも、もっと即物的な願いである『敵地から逃げたい』というものの方が強かつた。

そのせいもあり、目的地は転移魔法を使うにあたって最も注意すべき事であった、所謂目的地の曖昧化という愚を犯してしまった。

どれほど素晴らしい転移用の魔法道具を使っても、どれだけ素晴らしい魔力とその制御により転移魔法を詠唱したとしても、目的地

がきちんと定まっていない転移ほど質の悪いものはない。

しかも、地面に叩きつけるという過程を経たうえで発動するこれは、落とす程度では誤発動しないよう作られていた。それほど硬さは用意してあつたが、不運にも手首に当たつた居合拳は地に落ちる前の魔法道具に擦り、小さな傷から精密にそれだけが必要量だとされる魔力を少しだけこぼれさせていた。

精緻を必要とする転移魔法に対し、僅かばかりとはいえ誤差を与えた結果、この2があいあわさつて アランは見知らぬ森に飛ばされていた。

「……は？」

この一瞬だけ、アランの精神を蝕む激痛が消え失せ、黙つて前後左右を見回した。

見たこともない森に、見たこともない山が周囲にある。 空を遮る曇ひとつ存在せず、夜空に浮かぶ金色の月は地表に蠢く有象無象を睥睨する瞳であり、もしくは賢しくも動きまわる人間を嘲笑しつつも観察する為のぽつかりあいた穴だろうか？

地獄の釜に放り込まれ、四肢の内の3本を煮えたぎる熱湯で茹でられる絶望する様を、あの金色は笑いながら見ているのだろう。

今一度周囲に気を配れば、吹き付ける風は余りにも脆弱な自分を嘲笑い、揺らめく木々は全身を震わせて笑っているように見える。

死を具現化したような光のない暗黒で瞬く星からは悪意を感じ、花は毒蛾の如き醜悪さと美しさをない交ぜにした淫猥な香りで悪意を誘い、鳥も獣も蟲もギチギチとガリガリとゴリゴリとおぞましい音楽を奏で悪意をさらけ出す。

「いやだ、もういやだ！」

この時のアランの精神は、下手な心理学者が診なくとも何らかの異常をきたしているのはみてとれた。地面に這いつくばりながらも頭を振り回し、唯一動く左手だけを器用に使い頭皮の損傷などお構い無しに頭を搔きむしる。

痛みから気絶ではなく狂氣を選んだ精神だったが、むしろその狂気に引きずられ過ぎた事もあり、遂には意識を手放す選択をした。そんなアランの声を聞いたのか、ゆっくりと歩いてくる音がしていた。

「なんや、どうしたんや」  
「

アランの怪我を確認した少年は、見つけたものはしようがないと自分より大きなアランを抱き上げ、来た道をゆっくりと戻り始めた。意識もなく抱き上げられたアランには知るよしもないが、ここは紀州の山中だった。

自分に与えられた部屋で、いつものカバンに現地での滞在用の荷物を放り込み、パスポートを確認し飛行機のチケットは明日渡されると考えて、そのままベットに倒れ込む。

その表情には深い悔恨と、隠しきれないほどの中口嫌悪が混ざりあい、逆に無表情になるという化学反応を引き起こしていた。

黙々と荷造りをしていた高畑は、これが終わり次第すぐにでも出張する手筈になっていた。行き先は、そう 北アフリカだった。政情不安から魔法使いが暗躍していると通報があり、関東魔法協会に所属する高畑としてではなく、当然麻帆良の教師としてでもなく、『悠久の風』に所属する高畑へと命令が下つて日本を離れる事となつた。

これには今から日本を 否、神楽坂明日菜の元を離れなければならぬといふ不本意なものだったが、関東魔法協会の理事としての近衛近右衛門の説得もあり受諾していた。

これには当然ながら、少なくない疑惑がある。

いま麻帆良が、関東魔法協会が、そしてナギ・スプリングフィールドの遺産が直面している問題がある。

一番重要でありますのはナギ・スプリングフィールドの遺産である神楽坂明日菜。彼女について知る者は少ない方がよく、相手によつては確実に命に関わるだろう。

もう一つの遺産である真祖の吸血鬼エヴァンジエリンは、直接本人に被害は無いだろうが、むしろ遺産としてではなく存在を起因として麻帆良に問題を起こしている。

つまらない話だが、正義を絶対視する魔法使いにとつて吸血鬼は、しかも悪の魔法使いともなれば存在を容認できるものではない。

そんなエヴァンジエリンが、自ら踊つてもネギ・スプリングフィールドにぶつかつたというのを理解できず、実力で排除すべきだ

と轟<sup>クラク</sup>ずる者が多く居て、その規模は近右衛門の予想より遥かに大きかつた。余りの規模に、追跡している高畑を断られたが呼び戻すべく連絡をした程だ。

間接的な部分になるが、犯人に逃げられた理由として、少なからずこの電話によるロスタイルムがあつただろう。

とにかくその場は何とかしたが、いつ魔法先生達が暴発してもおかしくない。それは高畑にとつてもストレスだろうし、逆に高畑というエヴァンジエル派の実力者が居る事は彼等のストレスだろう。

多少の暴発ならば、近右衛門でも鎮圧や抑圧が出来るから問題はない。だからこそ、火種にならないように麻帆良から遠いアフリカ大陸へ移動させた。

本人は是が非でも残りたいと言つていたが、逃がした以上はこれから求められるのは戦力ではなく、あくまでフィールドワークであつて、犯人が見つかるまで高畑の出番は無いと言い聞かせることで、何とか日本から高畑を追い出せた。

これで、関東魔法協会の外敵に高畑が当たらない状況を作り出し、よつて山小屋という証拠に人が居ないようにした。ともすればいつも暴発するかわからないエヴァンジエル討伐を声高に叫ぶ連中の内、最も中心に近い5人の魔法先生を呼び出して、有無も言わざずに山小屋での証拠集めへと派遣した。

これで不用意に煽る魔法先生を麻帆良から外し、煽られてその気になつた者の飛躍した思想を収束させてしまえば、証拠が集まつて戻る頃にはほとぼりも冷めているだろう。

安心とはいえないが、安全ではあるだから。

良い意味でも悪い意味でも、電話を受けていた二ツクの動きと決

断は早かつた。

良い意味では、そう、あの電話を受けて即座に状況を整理できたこと。整理できた情報を頭で咀嚼し、もう既にのつべきならない所まで来ていると理解し、対策代わりと言うのも難だが、即座に上へお伺いを立てた事だ。

これは当然早ければ早いほどよく、選択肢が多く与えられ検討も楽になる。

悪い意味では、これが提案があつて上へお伺いを立てるのではなく、あくまで現状打破の手を考える事を放棄した挙句、上に泣きつくだけの行為でしかないという事だった。

突然の連絡でそれを聞かされた上層部 即ちメガロメセンブリア元老院議員とウェールズ魔法協会役員 は、寝耳に水の事態に目を皿にすると、理解が及ぶに連れて怒りの感情が止めどなく溢れてきた。

いきなりそんな連絡を受けたウェールズ魔法協会の役員であるランディ？ロジャーズからしてみれば、何で直ぐに報告ができなかつたのかと怒り、今更とはいえ急いで関東魔法協会について調べ始めた。

ランディ経由で連絡を受けたメガロメセンブリア元老院議員のジヨゼフ？キングとしても、余りにも急すぎる話しに半ば啞然としつつも隠蔽を試みる浅慮に腹を立てるが、他の誰でもなく連絡が最初に自分宛で届いた幸運を考慮した上で、次のゲート開放に合わせて旧世界へと渡る事にするが、ゲートの都合で少し日程が先に延びてしまつた。

この日程によりランディも上を考慮して二ヶクを勝手に処罰できず、この問題をジヨゼフと同じく自分に持つてきた事を幸運に思いつつ、自らの所属する派閥のイニシアチブを握るべく動き出した。

彼等の派閥の目的は、関東魔法協会理事長の強引な手引きと、ウェールズ魔法協会の理事でありながらもメルディニアナ魔法学校の校長として勝手に結託し、かの英雄の息子であるネギ？スプリングフ

イールドのウエールズ魔法協会への奪還と、理事の失脚へ動くべく精力的に会合を繰り返す。

当然魔法世界からゲートが繋がらなければ旧世界には来れないとはいっても、ジョゼフも暇をしている訳ではなく彼も精力的に元老院で動き出している。

動き出した内容もランティと似たり寄つたりだったが、単純に比べるならばジョゼフの方が遙かに悪辣だったと言えよう。ジョゼフは自らの立ち位置や権力基盤、現在の様々な情勢を考慮した上で2つの派閥に顔を出したのだ。

その2つとは、ウエールズ魔法協会からネギ？スプリングフィールドを魔法世界で自らの元に置き、関東魔法協会に出し抜かれながらも未だに虎視眈々と権益拡大の道具として英雄候補を狙っている派閥と、ナギ？スプリングフィールドという英雄の負の遺産としてネギ？スプリングフィールドを狙い、殺し損ねながらも未だに引導を渡すべく意気込む强硬派とも言うべき派閥だった。

余りにもあんまりな話だが、ジョゼフはこの2つの派閥のイニシアチブを握りつつ、どちらかに情報を制限したり優先したり派閥の動きを流したりして足場を固め、より確実な利益を得るべく動き出したのだ。

この時点での予想とは少しだけ外れているが、大きな餌を前に誰も特にニックを消そうとは考えていなかつた。ただし、誰の勘定にもニックの命は入つていなかつたが。

携帯電話の日付を見れば、既に日付は変わり現在は4月18日になっているのに諸澤は気付き、相手の時間を計算して携帯電話を弄っていた。

諸澤を含めた5人にとつて、ここ数日はまさに怒涛のように過ぎ

去つたと言つていよい程に内容が濃く、そして濃さに反比例して得るもののは少なかつた。

彼等は4月15日に学園長の指示に従い、人手不足を理由に麻帆良で散り散りとなつて、たつた4時間ではあるが休む間もなく侵入者から麻帆良の都市を、学校に通う生徒を、周辺住民も全て命がけで守り通した。正義の名のもとに敵を下し、正義たるべく街を救い、正義たらんとして人々の安寧を守つたのだ。

だからこそ、彼等には同日同時に起きていたそれが許せなかつた。それとは、正義の集団である魔法使いを貶める罪人、エヴァンジェリン？ A？ K？ マクダウェルによる英雄に成るべき存在であるネギ？ スプリングフィールド襲撃。

今まで善意無くとも非協力的であり何かと問題になつていったエヴァンジェリンだつたが、それまでは決定的な問題を麻帆良で起こしていなかつた為に、諸澤はとにかく排斥だと叫ぶだけのガンドルフイーニといった面々から距離をおき、どちらかと言えば明石のような中道に近い立ち位置を示して來ていた。

しかしながら、いくら実際に被害は無いに等しい結末だつたとはいえど、今回の事は比較するまでもなく明らかに”決定的”で、むしろ”致命的”な行動だろう。だから諸澤は立ち上がり、今まで抑えていた分が溢れたのか気付けばエヴァンジェリン排斥の急先鋒になつていた。

それを望むところだと受け止めるだけの氣概と、正義を信奉するが故の希望が諸澤に備わっていたのは、いつたい誰の不幸だつたのだろうか？

元々戦闘だけがメインではないがNGOとして世界を周り、時には高畠と同じ戦場にも居た諸澤は人望も中道派の中にはそれなりにあつたため、彼がエヴァンジェリン排斥の急先鋒となつたのに引きずられるようにして、それこそ勝手に中道派の切り崩しが行われてしまつた。

これに活氣付いた強硬派は、嘆願書という形で関東魔法協会に所

属する魔法使いとして署名を集め、理事長である近衛近右衛門に『エヴァンジェリン討伐』を正式に要求するに至っていた。時期の理由としてはネギに敗れた疲労もあり、しかも結界が効いて魔法がまともに使えない事と、戦闘で使った魔力を回復する為にまた生徒が毒牙に掛かるのを防ぐ為である。

予想よりも遙かに大きなうねりを受け、暴発から最悪関東魔法協会として内側から瓦解する危険を感じた近右衛門は、まず渡りに舟だと急いで高畠を『悠久の風』の依頼によりアフリカへ飛ばし、強硬派に蔓延る抑圧感を開放した。

どこからどう見てもエヴァンジェリン派でありながら、そのエヴァンジェリンに勝るとも劣らない実力者である高畠の存在は、巨大な戦力という逼迫感を与えてしまい、そこからくる抑圧は学園内とはいえ一般人のままで魔法先生が無意識にピリピリしてしまう程だった。

強硬派のガス抜きというよりは、むしろ余裕を持たせる事で暴発を抑えた近右衛門は次の手として、高畠が抜けた穴である証拠の山小屋の調査に諸澤と、彼に近しい4人の魔法先生を4月16日の段階で派遣すると決定した。

優秀な魔法先生として公示された5人は、明らかに意に沿わない自分達を麻帆良から外すのだと理解できたが、そんな個人的な理由の為に麻帆良を狙つて逃げ出した相手を無視できるはずがなく、正義の信念に則つて群馬山中の山小屋をまる1日調査していったのだ。

そして、たつた1日とはいえそれなりに集まつた証拠を片手に、彼等は彼等なりの戦いを始めようとしていたのだった。

## 9話 追うるものと追わせるもの

別段彼等は自分達が擁護されるとは思っていないが、自分達が正しいとは考えて行動していた。

絶対的な正義の中に存在する異分子の排除は、決して間違った主張ではない筈であり、その結果がこうして麻帆良から外されたとなれば、それは当然受け入れざるものでも受け入れた。

他は心底エヴァンジェリンの排斥のみを考えているのかもしれないが、元より中道派だった諸澤からすれば最低限の譲歩として、関東魔法協会によるエヴァンジェリンの魔法薬の管理と、今回の問題を起こした事に関する学園長による叱責と、事件による被害者への本人からの謝罪があれば、本当に最低限ではあるが手打ちが可能だと考えていた。

それは当然オフレコとして学園長にも伝えていたが、返ってきた返答は無言であり、気付けば麻帆良から外される仕打ちである。

わざわざ命令を聞いて群馬山中まで来たのも、あくまで麻帆良を守るという正義の為であつて、個人的な事を言つならば納得もしないし疑惑が渦巻いていた。

こんな時に、誰が言ったか思い出せないが　もしかすると自分が言った可能性もある　この中の誰かが、『学園長は我々を信用せず、我々の実力を信頼していないのでは』と吐露してしまった。

その言葉は他のどんな言葉より雄弁で、心にプライドに正義に深々と突き刺さり、5人を落胆させるには十分だつた。

だからこそ、ネガティブな空気が蔓延する中でありながら、それを払拭する声が上がつたのは必然だつたのだろう。

『だつたら俺達の実力を見せれば、学園長の力添えが無くとも一人前にこなせると信頼してくれるんじゃないかな?』

そこからは、あれよあれよと話が盛り上がり収集がつかなくなり、最終的にはこうして時差も問題無いからと諸澤は意を決して携帯電話に耳を当てていた。

『　はい高畠ですが』

「ああ、高畠先生ですか」

そう、電話の相手とは高畠？ト？タカミチである。

『どうしたんです諸澤先生？』

「今回の搜索ですが、様々な報告があります」

急な電話に驚く高畠を尻目に、諸澤は今回の搜索で見つかった情報どんどん高畠に開示していく。

実行犯の名称は不明だが、電話先を辿ると犯人はニューゲート魔法監獄の所長であること、実行犯はアルベル・カモミールというおじよ妖精を下調べし、神楽坂明日菜についても調べていたことを学園長に報告する前に高畠に伝えた。

これはこの停電の時期は、殆どの場合において海外出張している魔法先生も麻帆良に帰ってきていて、即座にアフリカへ渡った高畠がイギリスに最も近かつた為である。

討論にも近い盛り上がりの中では、自分達が行つて犯人を捕らえる事こそ結果であり手柄だという話しもあつたが、それより必要な人材を合理的に選び派遣した方が結果としては上々だという結論が出たために、白羽の矢が高畠に立つたのだ。

5人にとって幸運だったのは、高畠という人物が『神楽坂明日菜』という一点だけに対して鎌が緩く、意図していないとはいえるその弱点ともいうべきそれを突けた事である。

高畠にとつて不幸だつたのは、実行犯を取り逃がした深い悔恨と、その実行犯を捜す搜索から外され怒りの矛先が無くなつてゐたところへ、ぽんと犯人が現れしたことだつた。

そして、全ての者にとつて不幸だつたのは、5人の独断専行を止められなかつた事だらう。

「既に学園長へ報告したところ、一番イギリスに近い高畠先生へ犯人であるニック・ヴァイルヌーヴの捕縛の任務を最優先させ、捕縛次第帰国するようこと言付けを受けています」

『……学園長が？』

幸運にもこの時、高畠は頭に『何故学園長は直接僕にそれを伝えないんだ？』という疑問が浮かんだ。きっと、これが最後の分岐点だつたんだろう。

そして高畠は、不幸にも疑問を頭から吹き飛ばし、自らの拳を向けるべく連絡の礼をすると急いで非正規手段によるイギリス入国を目指して動き出していた。

電話を切つて内容を報告すると、5人は肩の荷が降りたように笑みを浮かべた。

犯人を捕まえる事は、誰がどう判断しても正義である。そして、それは必ず行われる事であるならば、事後承諾は確実にとれる保証があるということになる。

諸澤に今後この件について、冷静になつてから述懐するチャンスがあるとしたならば、必ず後悔しだらう。

何故ならば、海外出張も多い諸澤は外交といつものを多少知つていて、他所の土地の他所の領域の他所の領分を侵すには、それだけの時間と対価が必要だと知つていたからだ。だから、こんな無鉄砲に拙速に動けるものではないと、そう口にしだらう。

高畠も当然その程度は理解しているが、彼は学園長を信頼してい

るからこそ、許可とは学園長がそういったしがらみの中からもぎ取つてきた結果なのであって、それに報いるのが自分だと割り切つていたのでこの責任からは除外される。

その日の内に動き出し、イギリスまでの密航を準備して19日の深夜には本土を踏んでいた高畑は、そのままの足で目的地であるニック・ヴィルヌーヴの邸宅の見える丘へ来ていた。

今までの経験から考察した高畑は、先程の諸澤からの連絡では学園長が濁して伝えなかつた部分を読み取り、誰にもバレないよう隠れて行動している。

理由は簡単で、世間は『神楽坂明日菜』という存在をきちんと理解していないというのに、『神楽坂明日菜』の問題の為にネームバリューのある高畑が動いたとなれば、それは『神楽坂明日菜』に何があると公表するようなものである。

せっかく高畑と神楽坂の関係を知った上で、理由をじじつけてまで任務を与えてくれた事に感謝する高畑は、丘から眼下に広がる邸宅の周囲を探つていた。

「逃げられたせいが、警備がきつい……」

個人の家にしては仰々しい警備にかこまれた邸宅は、高畑からしてみれば自らの失態の象徴でしかないが、実際には邸宅の中でニックがランディとジョゼフという大物を呼んで会議をしている為に、要人警護も含めて守りが堅いだけだったのだが高畑には知るよしもない。

通常ならば仰々しい警備を見れば諦めるだろうが、ここに居る高畑の戦力は通常という言葉にくくるには難しく、むしろ2階の窓からチラリとニック・ヴィルヌーヴの写真と合致する男と、それを叱

責する男が見えた為にやる気は十分である。

小さく呼吸すると、高畠は丘から飛び降りた。

過剰な攻撃をする気はないとばかりに、警備の動きを読み取り、警備の技量を感じ取り、直線距離で邪魔になる警備のみを居合拳で黙らせて沈めていく。

幾重に守る警備を食い破り、窓を破つて侵入すればそのまま室内の2人を昏倒させ、壁越しに把握できた屋内警備を壁」と居合拳で沈めてしまう。

後は簡単なもので、そのまま[写眞の男であるニックの四肢を念のために碎いて肩に担ぐと、慌ただしく右往左往する警備をかいくぐり逃げ出せば任務完了]である。

後はこの男を麻帆良へ連れて帰り、神楽坂明日菜を調べた目的と実行犯を吐かせることさえできれば、実行犯に逃げられた雪辱を晴らした事にもなるだらう。

「この旧世界にわざわざジヨゼフ自ら足を運んだ理由は、書面や声だけではわからない部分までニックから読み取りたかった事と、そして

「やうじやな、そのままいけば利益は大きい」

「では、このまま派閥に入しつつ制御しましょう」

やつ、少しきしてニコーゲート魔法監獄に囚われた政友のピックマンと会つ為でもあり、これから行動指針を定める為でもあったのだ。

旧世界にわざわざ来るチャンスなど少ないので、せっかく来たからには会うべきだと考えていたジヨゼフは、魔法世界の住人にして

は旧世界の人間に気をきかせ席を外して会議室を2人きりにしてやつていた。

今のは語弊があった。ジョゼフにとっては如何に大事とはいえ、旧世界の人間の生死などは些末事に他ならず、ニックやランディとの連携は捨て去り独自に動く予定だった。

その為にこそ、こうして監獄内 相変わらずリゾート地のようだが に来て話をしていたのだ。

口を動かして渴いた喉に一息で紅茶を呑みると、爽やかな香りとともに渴きを潤す上物の紅茶を飲みきる。お代わりを注ぐ人形を無視するように時計を見れば、どうやら随分と集中していたようでかなりの時間が経過していた。

「さて、そろそろ私は戻ります」

「つむ。しかしジョゼフ、努々気を抜くんではないぞ」

座り心地のよい席から立ち上がり、ゆっくりと部屋を辞そうとしていたジョゼフの背中に声をかけられ、振り返ったジョゼフを真剣な目で見詰めるピックマンが居た。

その瞳に映るのは自身への心配であるが、むしろ元老院内で共に居られない事への後悔の色も強く、滲みでる自戒と自嘲が読み取れた。

「過度に派閥へ傾倒せず、言つてしまえば浮動票として甘い蜜を啜るようにして、大きな権益を求めず要所要所で細く長く奪つてきたが、時には上手に時には下手に出てくる間抜け共を笑つとつたが、気付けば足をすくわれてこのままよ」

メガロメセンブリア元老院において、ピックマンとジョゼフの立ち位置はとても政治家として讃められたものではなく、俗に言うと

ころの信念なき風見鶏だった。

いや、まったく信念が無い訳ではなく、どちらも利益を得る為に全力を注いでいたと言える。この2人が政友であると知る者は少なく、特に同期というわけでもなければ同郷でもない、むしろ年齢差は親子ほどある。

今となつては政友の2人だが、実は本人でさえ何故ここまで一緒に動くようになったのか、切欠をまったく憶えていなかつた。初めて会つた時は共に眼中になく、気付いたら2人は求めあうように補いあうように、利益という言葉のみを信奉して元老院で動いてきた。

2人は大きな議決において、時に同じ派閥に纏まり時に敵対し派閥同士の動きを制御し、時には無駄に煽り事を大きくしまりもしてきている。

そうやって小さいながらも奪い続け、積み上げ続けた結果として、権益や利益の奪われた部分部分が糸となり偶々動きを縛られた議員が出た。だから大きく奪つて目の敵にされないようにしてきていたピックマンは目をつけられ、あれよあれよと有ること無いこと罪状を言い渡され、気付いた時にはバカにしていた相手によつて肅正されていたのだった。

## 9話　追つもの追わせるもの（後書き）

偶には後書きを書いてみようと考へてみましたが、特に思い付きませんでした……

ありきたりな言葉ですが、小さな疑問から大きな疑問まで何かありましたら感想の方へお願ひします

感想の一つ一つが作者のやる気を奮い立たせてくれますのでよろしくお願ひします

## 10話 動くもの動けないもの

地下の直通路を歩き、屋敷へと帰ってきたジョゼフを待ち受けていたのはニックからのつまらない歓待でもなく、ランディからの元老院の情報を少しでも抜き出そうという気分の悪い視線でもなかつた。

帰ってきたジョゼフを迎えたのは、通路の途中でも聞こえていたが、耳をつんざくようにして鳴り止まないサイレンの音と、蜂の巣をつついたように慌てふためく警備の連中だった。

「 おい！」

背中からかけられた強い声に、いつたいなんだとばかりに振り返れば、そこには自身の体が木つ端かなにかかと感じてしまうほどの剛腕巨体の男が、こちらを鋭い眼差しで睨み付けていた。

生憎とこんな低脳そうな輩に友人は居ないが、どうやら相手もこちらに友好的ではないらしく、睨むだけではなく杖の先が向けられている。

「 貴様は何者だ！」

そこで、ふと相手が着ている服装は警備の連中が着ているものだと思い出し、飼い犬の躊躇すらできないニックを脳内で罵倒しつつ、ぞんざいに自分の姓名と所属を名乗る。

最初こそ名前を聞いても『誰だ？』と訝しんでいた相手だつたが、段々と理解が及んだようで顔を蒼白くしていき、所属であるメガロメセンブリア元老院の名を出す頃には憐れにも膝を震わせていた。例え正義に燃える善良な政治家であれ、政治界の苛烈さや悪意に嫌気が差して政治の理念からは少し身をいた中道の政治家であれ、

それこそ自身のように他者を蔑ろにし踏み潰す事で利益を探る政治家ならば尚更だが、政治という社会的な権力構造で上位に居る者は多寡に差こそあれ、少なからず嗜虐的な趣味を持っている。

いや、例外として普段嗜虐的な立場にあるからこそ、逆に自虐的な趣味を発露する輩も居るが今は置いておく。

何が言いたいかといえば、例に漏れず嗜虐的な思考を宿している身からすれば、片腕を振るだけで自身を殺せそうな巨体の男が、あくまで脳筋そうな相手ではあるのだが恐怖におののき、自らの生命の心配をする哀願の眼差しをされるとそぞられてしまう。

別段男色の気があるわけではないのだが、やはりこれほど判りやすいまでに力強い相手が貧弱とも言うべき私に恐怖するというのは、社会構造の縮図を見せられたようで昂つてくるものがある。

とはいっても、このような状況下に置かれていることもあり、目の前に鬻るにはちよびいい獲物がいるにも関わらず、時間の都合上からいたぶるでも殺すでもなく、昂る嗜虐心を内心なんとか慰める。

「……ふん。 それより、これは何の騒ぎだ？」

「がつ、外部からの襲撃です！ 議員殿のもとへは賊が向かわなかつたでしょつか？」

この邸宅とニユーゲート魔法監獄が繋がっていると知る者は、当然その秘匿性も相成り少ない。

だから、懲りそこに行っていたとは言わず、むしろ現状を聞き出してから顔を顰めた。

「被害の程はどうなつていい

「警備に当たつていた者には、重傷5人と軽傷が11人」

「　　お前たち如きの被害に興味はない」

「はつ！　会議室に在室していたロジャーズ氏は意識不明ですが軽傷、共に在室していたヴィルヌーヴ氏は……。その」

先程よりも更に顔色を悪くしつつ、急に歯切れが悪くなるのに苛立ちながら、「早く話せ」とせつつけば意を決したように口を開いた。

「ヴィルヌーヴ氏は、賊に誘拐された恐れがあります」

一辺の曇りもなく、ただの欠片の冗談も含ませずに言われた言葉に、理解よりも納得よりも疑問が首をもたげる。

誘拐は通常、どこかが後ろ楯についていて、情報収集から実行？離脱と複数による連携が常套手段である。とはいえ、賊が単独か複数かといった部分は、今はそれほど重要ではない。

今一番の疑問は、犯人の意図だった。

何故犯人は、この邸宅に侵入した挙句にヴィルヌーヴを誘拐したのか？　様々な可能性が考えられるが、それを否定する様々な理由もある。

まず1つ目だが、犯人が元々かなり私腹を肥やして金を貯えているヴィルヌーヴを狙い、その身柄を確保した上で脅迫なり拷問なりでの略奪を考えた場合だ。

しかし、その割りには邸宅内の金品には手をつけず、しかも警備が固くなつた今を狙う必要は無い、だろ？。

2つ目の可能性だが、犯人が魔法世界で何らかを成す為に、元老院議員である自分を狙つていて、偶々席を外している時に侵入して代わりに居たヴィルヌーヴを誘拐した場合だ。

しかし、緊急の案件で旧世界に来たことを嗅ぎ付けるほどの相手が、態々標的が居ないから違う者を誘拐するなんてあり得ないだろ

う。肉親のような近しい者ならまだしも、ビジネス相手でしかない者を誘拐するのはリスクを抱えすぎる。

3つ目の可能性だが、犯人は旧世界で何かを成す為に、ここに集まつた権力者なら誘拐するのは誰でも良かつた場合だ。

これこそあり得ない話で、だったらなぜロジャーズが無事なのかが問題になる。

明確に何かしらの理由があり、他の手段では達成できないのでヴィルヌーヴを誘拐したと考えた場合、いつたい何があるだろうか？  
考え事をしつつ、無言で歩き始めた私を慌てて囮うようにして、  
それぞが喧しく「危険ですから避難を！」と喚く警備を散らせ、  
足早にロジャーズが寝かされている部屋へと急ぐ。

既にジョゼフの中では、犯人の魂胆こそわからないものの、狙い  
は他の誰でもなくヴィルヌーヴだったのだと自己完結していた。  
そして自己完結した上で、犯人は既に逃亡済みだと考えていて、  
この場は安全だと考えていたのである。

これは誰も知らぬ事だが、事実ヴィルヌーヴを誘拐した高畠は、  
面倒な追っ手や公的機関の捜索を嫌い、尋問に関しては麻帆良にて  
時間を費やすべく即座にウェールズを離脱していた。

それはさておき、部屋を目指しながらもジョゼフの頭のなかでは  
今回の事件について考えていて、少なからず犯人に当たりはついて  
いた。

しかし、それに絶対的な自信があるわけでもなく、動くには余り  
にも拙速に過ぎると感じており、犯人の可能性としては3割もない  
が、現状ではもつとも可能性が高いだろう。

ロジャーズが犯人を見ていれば簡単だが、こうも手際のいい犯人  
がそれを許すとは思えないが、これも確認作業だと目的の部屋へ入  
つた。

「キング様、ご無事でしたか！」

声をあげた白衣の医者に、無事であり怪我はないと伝えると、眠つたままのロジャーズを起こすように言った。話を聞くに、どうにも偉い相手だけに、自分の一存では起こし難かつたようだ。

「ん……あ、ここは？」

「起きたか」

目覚めてゆっくりと周囲を伺つロジャーズに声をかけると、声を聞いて反射的にこちらを向いて、相手が私だと気付くと更に驚いたような顔をした。

まあ、これに関しては理解できる。寝起きに自分より偉い人間が近くにいれば、私だって驚くだろう。

「何があつたか話してやる」

襲撃があつた事を説明し終えた時、ロジャーズの顔に映つていたのもジヨゼフと同じ類いの疑問だつた。だが、それをあえて無視し、問題の犯人を見たか聞いたのだが、やはりと言つか予想通りと言つか見ていないようである。

「そうか……やはり、犯人を見ていいなか

「申し訳ありません」

「いや、仕方ない。しかし、だ。これはウェールズ魔法協会への、いや我々メガロメセンブリア元老院への重大な挑戦だと私は受け止めている」

謝る言葉が終わるや否や、被せるように口にしたこひらの意見に

対して、ロジャーズは顔を顰めかけてから慌てて真顔に戻した。

これは簡単に言つてしまえば、組織の上下確認である。確認し

た上で、捜査権はウェールズ魔法協会ではなくメガロメセンブリア

元老院にあると主張したのである。

ロジャーズが顔を一瞬だが顰めたのは、それが理解できたからではない。それを理解した上で、起きたばかりの弊害か事件捜査の名も実も利益が読めないので。

「……しかし、態々本国のお手を煩わさずとも」

「我々はどのような相手であれ、貴賤に關係なく挑戦を受ける立場にある。私が居ぬ間を狙う薄汚い賊であれ、挑戦してくるならば我々が滅ぼすまでだ」

元老院としての立場を強調され、元老院は敵にたいして強硬に対処すると主張を聞かされれば、残念ながら現在の立場がウェールズ魔法協会の代表でもないランディは、何らかの利益が奪われた事だけは理解しながらも、歯噛みしつつ飲むしかない。

「起きてすぐで悪いが、捜査権が元老院にあると伝え、急いでこの邸宅を現場として確保してほしい」

「わかりました」

連絡をするロジャーズから目を離し、急いで地下からニューゲート魔法監獄へととんぼ返りして、先程まで会っていたピックマンの元を訪ねた。

すぐに出戻つて来たジョゼフを訝しんだが、その取り乱し様から冷たい飲み物を人形に用意させると、先程と同様に向かい合つて座る。

「何があつた？」

ジヨゼフが説明を終え、温くなつた飲み物に手をつける頃には、ピックマンも難しい表情で腕を組んで黙つていた。

何があつたのか理解できだし、ジヨゼフが何を感じたのかも理解できた。しかし、そのどれもに、根拠の2文字が足りなかつた。

「ふむ……確かに関東魔法協会への侵入に失敗し、連絡が途絶えた事から消されたと考えたとしてじゃが、最低限考える頭さえあればこの襲撃は悪手だとわかるじやうひ。小さな組織ならともかく、魔法協会のような規模を持つたものがやる事ではない」

「ええ、それは私も感じましたが、ヴィルヌーヴを誘拐するプラスと今襲撃するマイナスを考えると、逆に小さければ小さい組織ほど割りにあわなくなつてきます」

何より難しいのは、結局誰が襲撃してもマイナスになるのである。搾るのは恣意的にならざるを得ず、そうなれば可能性は関東魔法協会が一番高いと考えたのだ。

「それで、今は何をしているんじや」

「まだ現場の確保を指示し、捜査権をウエールズ魔法協会から元老院へ召し上げた段階です」

「だとすれば、賭けにはなるが元老院で関東魔法協会に近しい輩の切り崩しも必要じやな。有力者が多いという意味では、ここに居

る連中への意識操作はわしに任せなさい

「話が早くて助かると頷いたジョゼフは、拙速には拙速でぶつかるべく次の手を考えていたのだった。

## 11話 組むもの組まないもの

ウェールズ魔法協会の本部に1室間借りし、ジョゼフは次々と運び込まれる資料を電子媒体から紙媒体まで目を通し続けていた。既にヴィルヌーヴ邸の解析は済ませてあり、わかっているのは犯人は手際がよく合理的で、更には狡猾な人物であり、侵入は近くの丘から直線的に突き進み、帰りはあちこちに攻撃を仕掛ける事で陽動や搅乱をしていったようだつた。

おかげで最初は侵入した犯人の人数すら読めず、強力な攻撃により警備は恐慌状態にまで陥つたらしい。

それと、新たな犯人の情報としては、侵入時と撤退時に破壊された部分を調査した結果、破壊痕こそ残つてゐるもの火の気が無い上に火薬類も確認出来なかつたので爆発物はあり得ず、魔力の残痕も明らかに希薄である為に、犯人は氣かそれに類いする技術をもつた達人レベルの存在であると断定した。

これだけでも、絞り込みの条件としてはかなり捲るだろう。なんせ、純粹な魔法使いを省けるだけで、いつたいどれだけ作業が効率化するだらうか？

容疑者の絞り込みにあたり純粹な魔法使いを削つていき、氣を使う人間 悪魔ではなく人間の可能性が高い や魔法だけでなく高度に氣も使える人間を割り出していく。

まずそのふるいにかけるのは、いまジョゼフが目を通してゐるリストの中からである。このリストは、まず無いだろうがここ1ヶ月内にイギリスへ入国した者と、襲撃後から今にかけて出国した者のリストになつてゐる。

とはいゝ、余程の間抜けか抜けか、こちらを舐めていなない限り入国も出国も正規ルートならば偽名だろう。何度も言うがこれは確認でしかなく、犯人が居ないのは『残念』ではなく『やはり』なのだ。

本命はこちらと並行して、ウェールズ魔法協会を動かす陣頭指揮をロジャーズに任せた方で、そっちには日本国からの正規出国リストと、各国に点在するNGOへ正規に出向している者の調査及び、情報屋を使った非正規リストを作らせている。

魔法協会はそれぞれが敵対しているわけでも、それこそ非合法組織でもない 拠点を置いた国家の法を遵守してるかは別だが ので、元々理事長から一般職まで横の繋がりとして権限があれば開示されている。

役員ともなれば、当然閲覧権限は与えられており、開示された情報元に気の使い手をリスト化し、その使い手が国内に居るか国外に居るかを調べさせた。

これでは日本国から非正規に出国した場合、足取りを追えなくなるのではないかと考えるだろうが、ウェールズ魔法協会からネギ？スプリングフィールドを奪うという理不尽に対し、せめて監視員として受け入れると関東魔法協会に捩じ込んだ者が居るので、非正規で出国したとしても関東魔法協会に居るか居ないかはわかるのである。

あれから時間が経ち、PCモニタを見ていて疲れた目を解していだジョゼフのもとへ、こちらも疲れた表情のロジャーズが訪ねてきた。

にこやかでも和やかでもないが、殺伐とした空氣の中でのロジャーズは脇から椅子を取り出し、ジョゼフの対面に座った。

「ある程度の目処がたちました

「絞り始めたのか？」

「まずわかったのは、関東魔法協会は綺麗な組織ですね。 居るは

「ずなのに居ない人間なんて居やしない」

元老院を皮肉ったのかウェールズ魔法協会を皮肉ったのかはわからぬが、どうやらロジャーズの態度を見る限り関東魔法協会は白のようだが

「ただし、一人だけ動きが異質な人間がいました」

「異質だと？」

「こちらの疑問に対し、勿体ぶるように小さく頷いたロジャーズは、ゆっくりとその理由を口にした。

「ええ。 北アフリカで利権の絡み合いも、世界の金の動きも理解せずに戦う『悠久の風』によれば、関東魔法協会から派遣された高畠？ T？ タカミチは、戦闘の間に一時期ですが消息不明となり、先程ですが急遽予定を繰り上げて帰国したそうです」

「随分とまた…… 大物が出張つてきたな」

容疑者候補である高畠とは、過去に輝き今に名だたる『紅き翼』に所属した実績があり、それが解散し散り散りとなつた今も精力的に動いている為に、所謂直接的な権力こそ無いものの名誉と人望を人一倍築いてきた男だった。

その実績こそ眩く燐然と輝くものがあるが、我々が我々として元老院にある限り魔法も使えぬ輩を『立派な魔法使い』に選ぶ事はあり得ない。 魔法世界に必要な『立派な魔法使い』とは、元老院の既得権益を侵さず我々のお題目に対して不審すら抱かず、ただ黙つて言われた通り踊る者である。

そんな『立派な魔法使い』の条件はさておき、約5時間前に北ア

フリカを出発したとなると、ロジャーズ曰く日本への到着は残り5時間近くは残つてゐるらしい。

機上の人となつた高畠からヴィルヌーヴを奪う事は不可能で、関東魔法協会に入られでもしたら監視員でも見つける事は難しいだろう。 いつたいどうしたものかと悩んでいるところで、急にロジャーズが神妙な顔をすると、部屋に備え付けのテレビの電源を入れた。そこに映るものと、語られる内容にジョゼフは絶句してしまう。

「捜査権は差し上げましたが、我々ウェールズ魔法協会こそが眞の被害者です。 これは当然ながら、正統な権利なのです」

神妙な表情で、しかしかすかな歓喜を漏らすロジャーズがテレビから視線を奪うように立ち上がり、どこに感謝の意がこもつているのかもわからない最敬礼をする。

「（）協力ありがとう（）」  
「我々はメガロメセンブリア元老院の”支援”により、必ずやウェールズ魔法協会の手により犯人を捕まえてみせます」

ここで初めてジョゼフは、ロジャーズを手元で管理しなかつた事を内心嘆き、屈辱のあまり無意識の内に歯軋りしていた。

（）の部屋のみならず、関東魔法協会では魔法関係者が居る部屋ではテレビの電源がつけられ、突如行われたウェールズ魔法協会からの宣言に聞き入つた。

しかし、関東魔法協会を束ねる理事長を勤める近衛近右衛門は、半ばこれを話し半分に聞き流している。

『この考えは既にメガロメセンブリア元老院からの“賛同”を得ております、”支援”を受けるからには犯罪者を逃す事はできない。犯人の意図は未だ連絡がなく不明だが、ニック・ヴィルヌーヴ所長を誘拐する卑劣漢を許すわけにはいかないのだ！全世界の魔法使い諸君と其を束ねる各魔法協会殿、どうか我々と共に手を取り合ひ、犯人逮捕へ尽力して欲しい』

強く宣言してから頭を下げるウェールズ魔法協会理事長 メルディアナ魔法学校の校長だ の姿を見ても、近右衛門の胸に響くものは何もない。

そもそも、あくまで世間では二ユーロゲート魔法監獄の酷さは噂でしかないが、それが紛れもない事実だとということを近右衛門は知つており、その所長が本当かはわからないが誘拐されたくらいで、ここまで異例の早さで宣言など出せるだろうか？

単純に考えてしまえば、この宣言はこちらの世界の人間であれ魔法世界の人間であれ、少しでも関わったならばヴィルヌーヴ所長を助けなければ纏めて失脚するという脅しだろう。便宜を図つた人間も図られた人間も失脚するとなれば、ウェールズ魔法協会も全力で動くであろうし、周囲の賛同も根強い事までは読める。

他にも何らかの意図が隠されている可能性もあるが、その意図に關しては情報が少なすぎ、読み取るにはかなり難しいものがある。だが、例えどんな裏があつたとしても、関東魔法協会に関わる内容でなければ問題はない。

「学園長！」

ウェールズ魔法協会による宣言がなされてからと言つもの、学園長室は魔法先生はもとより魔法生徒まで千客万来の様相をしており、入れ替わり立ち替わりに入つて来ては正義の魔法使いらしく『宣言への賛同』を要求してくる。

正義の味方を目指す彼等にてつてみれば、悪事をなす犯罪者を捕まえるのを手伝うのは当然の事で、困難に立ち向かってこそ自らの成長があると信じて疑っていないようだつた。

言いたい事を全て言い切り、気分が良もそうに部屋を出でいったガンドルフィーーの背に小さくため息を吐き、関東以外の他国の魔法協会も公式に賛同宣言を上げるのを見て、これ以上先延ばしにすると魔法先生達の心証を悪くすると考え、悪夢が近づいているとも知らずに近右衛門も関東魔法協会の理事長という公人の立場として、全世界に賛同の立場を宣言してしまつた。

現状で何の情報もない近右衛門からすれば、賛同せず身内の失望を態々買うよりは、特に何かをするわけではなく宣言への賛同の姿勢を表明する方がリスクが少なく、逆にエヴァンジエリンに対する不満をそちらに向けてしまえば、統率と士気を取り戻せリターンは高く魅力的だつたのだ。

だから公式に会見を開き、関東魔法協会がウェーラーズ魔法協会の考えに賛同し、犯人逮捕への尽力を宣言し終え、しづなに出された茶を飲み終えて書類整理に精を出していたところにかかってきた電話に、近右衛門は表情を崩す程に困惑せざるを得なかつた。

まず困惑したのが、かかつてきた電話が盗聴等の心配がない秘匿性が高い番号だつたこと。そして、この番号の持ち主である高畑は、国外線経由ならばわかるが、帰国は早くても1週間後のはずである事だつた。

『高畑です』

「やはりタカラミチ君かの。帰国にはちと早い気がするんじゃが?」

無理をして出張が1日2日短くなる事はあれど、1週間も短くなる事は普通ありえない。それに、1週間も早く帰国できるようになれば、さすがに『悠久の風』からその旨がこちりに伝えられるは

ずである。

個人的にはもう少ししほりが冷めるまで北アフリカに居て欲しかったが、その予先を懲々ウェールズ魔法協会が用意してくれたのだから、早めの帰国も悪くはない。

と、近右衛門は高畠の本題を聞く前は、全てを樂観視していたと言つてよい。

『指示通り明日菜君の情報を握っていたニシク・ヴィルヌーヴを捕縛してきましたが、学園長室でいいですか？』

「……？」

それを聞いて、最初は高畠が何を言つているのか理解出来なかつた。自分とよく似た言語であり、意味はわかるが理解出来ない矛盾が脳内を錯綜する。

今この瞬間、魔法使いであり政治家でもある近右衛門は今までの人生でも数少ない、所謂現実逃避をしていたのだ。

しかしながら、類い稀な経験も長くは続かず、脳内で弾いていた算盤が音を立て崩れると同時に生じた酷い頭痛を感じつつ、とにかく電話越しでは話しにならんと一刻一秒でも早く学園長室へ来るよう命じ、電話を叩き壊す勢いで切つた。

「いかん…… これはいかんぞ」

まさかこんな間抜けを見るとは思わず、重いたため息を吐いてから背もたれに倒れ込むと、髪を撫でつつもう一度ため息を吐いたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7564u/>

---

アルベール?カモミールを巡る諸問題

2011年8月30日22時58分発行